和語隰隲録

ロ9
3442

全

ロ 9
4092

□9
3442
~~1911~~
1717
.19

門 四 号 4092 巻

明 袁了凡 著
日本 櫻 譯

和語陰騭錄 全

此編ハ大明袁了凡ト云人其子天啓ノ袁訓乃抱被ゐて老ゐ男女両ヲ退ゐ居ますほる書也純仁ど行ひ災害をまぬかれ事ハる事ハるへ

和語陰騭錄序

古曰積金積書不如積陰德於冥々中遺于孫永垂云計誠哉此言也吾鄉有一先名老人者讚州人也博學謙讓不求聞達憲其

昭和十六年一月十一日寄 尼野貴英氏贈

風采永未見者不知亭幸奉
慈誨久矣一時披覽興之暇筆為吾
靈日梗陰騭錄而此篇也實了
凡先生所以靈践陰德而為子
孫監是以拜聽者莫不擊節
嘆賞矣惟惜文辭至簡而讀
者憾焉舉衆切請為愚夫愚
婦假國字以解之公諸天下師
徐領而就簀於是一篇之大旨
瞭然乎目下而後初足以校其

宰矣嗚乎夫人之處世也遊乎
畛之穀中固不能遁順逆之境
而況有不測之變熟視夫立
命之說則天網恢恢疎而不漏
溫觴之勢如物使然豈不幽

且確乎哉吾師於自稱死名
老人也豈不赤積陰德之根據
乎同志參聖驥虞如者則乞
予題言予雖不肖而闕此盛
事亦何其幸歟是所以敢不

鐸安永丙申春三月南越

角庵乾一重益謹叙

○此書和漢ともに未注釋の事を記そ。お後の序跋ともに甚沙汰する。此書の纂者ハ大明賜進士袁黄字ハ了凡と云人甚児天啓へ敕訓の物語りた郷ゝゝ者るり一篇の始終甚んなりて。讀べきるり。右袁了凡ハ歷史綱鑑の評者りて唐土りて八名ある紀大儒るり。日本文禄年中。豊臣公朝鮮征の時あり。贊畫軍務とゝゝる方ゝて大明ゝり加藤の大將書如松ゟ従て朝鮮へまりし人るり

○此和漢ゟ本文を擧て漢とそべきるりれどもゝゝて八紙墨の費も多ー又本文を用るほどの人

ハ此れを燈を備へごとくにてもよろしかるべきなれバ是
を畧せるなり
○此書の一體達意を專として辭ぎくうもなく
故文体ハ無益の飾言ハ省き結びたる者故書きやう
二字三字一句二句にて切りよくきるやうの
ふとなく言外のこゝを味ハせたるも有り然ると云て本文のみを添加
もつてハんべんざる者なり又但通俗ともいふべき
なる故ふ字句及び事實ハ必ずしも一一ふ注釋せ
ざる者なり

○唐士ふ及第の業とつかふまつるの制度通
とく〻寫本も諸書を引て詳也。書くハ繁雜
なり。而後耳をくゝりて京へ及バを。まく〻那く
とちがひ。此分にて學校として立農工
村里ごとに。學校を設けて。士農工
高のそべく。志ある者を教へ學
べしめ。其中にて學才ある者を。村の學校より
選び出して郡の學校へ擧。郡より城下へ城下より
京へと次〻ふ選び出して。其人の生れつき
の向きふ從て。百姓ハ百姓役人ふ仕へるなり。
故ふ志ある者ハ其出世の爲ふ學官をとるなり。

号を及第の業とする也。今日まで至人そ
ず。吾日八士ふ作り旗本にする犬名ふ作るる故
士の人へ唯此事の二筆ひきげむるる。固て此の
書の始終皆及第の人の名のみをらて教へ
喩と為るより。此書を見るる
第一のんになり
○文意の断絶せざるふ。韋駄を短くとるへ讀
者の退屈を恐てなり

和語陰騭録

陰騭の二字ハ書経ふ出たりんハ人くの陽間よ
悪ふ報て後くまり禍とるるふ一をやどる当ふ
騭とうよくくて名つけたる者なり

立命之学 立命の学ましんぴもと孟子ふ天命を
ふうり死生有命ふ安んじ義ふ従ふの者ことを而るふ後命
ふるりの子るるさりのふ為ふ為ふ為

甚方が父も爲て。そを思ひてそこそこ畫つり。母
人の命るれバ。啓むべくもやうもなけれバそうり學
を学びーるり
さて或時予甚雲ちとらふちれ遊び居るに
一人髯長き老人出来まり。そ穏のくとこへ
それハ予も客を改め懇懃よりてもてなしたるに時ふ
此老人予に向ひて曰。爾ハ及第出世をこう人なれ
幸ハ決して学校ふそて進むべきもの。何なる及第
の業を捨て警者ふ成まる耶。吾ハ雲蘭こそれ先生
と稱せらるゝ者にて。邵康節の易通の秘極をも
なるりのこり。此易通者外ふ授くべき者ふ。但

書厭ふ佛ふ屬さ教ある故ふ。遠くことを踏と爲
来まり。来厭そんぢ
爲ること知をこうて。業内せらるべくとりけり。我等を時何も怪ーれるれも思ひ
うども先孔宅ふ帰り母人ふ此由を告官ひけれバ母
人の曰それハ奇妙なるを云者ろるの。何ともせ〳〵者
底のくとてハをもとはけまひて。
甚教を受てこるべしーこるり。此ふ困く一号をえ
つらひ態よかくまひ居るり
さてそれより。試ふ色このるを借古志むるれ成ふ
ふ一つも遠ふるるり。當時のくともれ更のやうれ

八云ふ事なり。此ふたりの老人の教ふるやうせて業を止くるのごとく及等の学文をせりとて此老人ら一生の大概をたて曰く貴殿藁の年ゟ入学校ふ入り。某の年ゟ入撰人ふ挙られ縦令村の学ふ授ふてハ第十四番目郡の学ふ授ふてハ第九番目ゟ。城下の学ふ授ふてハ第七十二番目。城下の学ふ授ふてハ第九番目ゟ。公儀の御扶持を含まる藁の年ゟ藁の年まて。九十一人ふ斗る者ゟ。而して後ふ某の年ゟ。貢人と云ふ名ゟ成く後某の年ゟ。選挙せられく四川と云ふ官ゟ成るゟ。此の大尹と云官ゟ成るゟ。此役目を務むるゟ二年まふて又京ふ登ゟ十三歳八月十四日ゟ此の時ゟ病死するゟ。惜ふ貴ふ余ハ一生ゟ子ども一人ゟ。妻ゟ一人ゟ。ゟ共悉くまとゟ亡て慎んで一生の覚悟ゟ定めゟるゟ

此ゟう漫ふ郷学ゟ国学ゟ学て撰ゟれ出る毎ゟ。ゟ事ふ教ハ云ふ処ゟ極て細ゟ。ゟまゟ一つゟ。て老人の言ふ違ふゟ。ゟ其中一つゟ。ゟ。ゟ。

此時予ぐんおこ斗石のお遣ひ付て老人を疑ひ
なり給るとそのよ又揚屋へ人皆帰りを不吟味
るうそう自出して屠蘇
旬公老人のおひ定めうる年月の恙びくまるれ
是此時狂く老人を疑ひそり甚だとくくして狂を
経る処又潤公とそ人そり予が作りそる文章を
見て大ふ驚き此も劣らぬ器量也
うやうの器量の人をむざくして御用よろくぬそ
不忠のそりそりて揚屋の憤を解和らけ重く
役有ふまじて法の通りの一時言ふ貴人今こそみそり
此時扶持方を計るの給ふ怜と老人の言ふ尊もたゞ

八ど九十一石み斗とそ
も狭きも遥きそも盡くそ天令一定の道理者りこそ。
そを悟り且つ老人の妙術と嘆伏して猛一生乃
覚悟を究め毛頭外の望こそを止めてんそ
らくくと成しそり
それう懇都ふへて留事一年也しが其間も故有
て南雞と云処へそりしに役所せさそ而ふ歩んで
棲霞寺み往いくそ禅師と語い従
来離洞の情を述べそ世間出世の物語ふ長ト三日
三夜寝食を忘まくふ津らくし。雲谷禅師
法門乃悟りを切ざるへ妄念ふ障へられバこそ

我と住諸こそ久しき三夜の同おーの安念を起
さと風情をこんぞと何ぞ見解有て然こやとこそ。
予ぞ曰我ぎ孔先生と仰ぎ釋の教こを受て世の
中の貴賤貧富壽夭生死皆定うの教有るまを
知ぎう。然る上ハ何の願ひ有てさ安念を起
さとやと言くこそ。其時雲谷大に笑ひ曰。我今
まで八貴賤を當世豪傑のこくと思ひしに今の座若を見てハたゞ
さー通りの凡人ぞりて賢くハ亘ー愚然ーぞり。
良ありて予ぞ曰ざやうに呼ーねふの定てる理
ありくーぞりさーとひられバ雲谷の曰く夫ず

道理有るまり。幸ぞ令數こ云者そ。生の朝
ぞりて死の夕べ有るまで。一定ーて生ま出る者ぞり。
而まぞも極若のくと。極悪のくとハ一所住の若悪
の強さふ引られくぞ。天ぞり定め出る令數の多用
さぞりくへ遠ふまる者ぞり。但常底の凡人のこ。令
救ふ縛られて一生を苦む者ぞり。貴殿二十年来彼
老人ぞ出入用ありえられ。一毛の相違も無きハ取ず
ぞられ凡人ぞりとそ予ぞ曰足ぎハ奇ぞりー私論
を以ぞ考ぞる而る内ぺ人間一生生れ受ける。天令
一定の数も過れらく者ぞて候や。雲谷曰
ぞりまも過まらくる事ふ。我ま世間をとるふ古今

ともよ。名こそきこえ人ほとゝしき天擇よ迷へり。孝厳我説をきゝ
空んと思られば我をさそてくれよかし。
聖人の作らるる書経よ曰作善天降之百祥作不
善天降之百殃と云意なく善を為せば天より百の祥
を降へ悪を作せば天より百の禍を降もことわり。天命
一定の者ゆゑ福も一定ぞかし。何ぞ此のごとく
一生の内よ於て與へつ奪ひつ不定ぞや。又我が仏
教の中よ求功名得功名求富貴得富貴求男
女得男女求長寿得長寿とそう。無まじ初生乃
至定りたる。天命も甚修の不行よ固て中途よ
の天命を変じて。或ハ福を降へ或ハ禍を降へくこと

そう。左傳よも陳の慶氏が殺さるゝ處よ書経をひ
て天命ハ常無き者とそう。又そうの聖人法門の如来倶よ
何とそうやとそう
予ぶ曰。儒仏の聖賢を引
ま也。但し今おゝ疑ひ無
則得之求在我者也とそう。又曰
我ら身よ備りたる。仁義禮智の道徳を求るなり
故よ求在我者ハよ非ずや。内よ備りたる所乃
功名富貴ぞとおもふ事ハ仏説よ出る
とも孟子なごの宣ハざる事也雲谷曰儒仏の乃深

廣狹道路の譬へ向ハ各別なるやうなれども。畢竟感通乃道理ハ丸で全く不同ハ無き者なれども。後儒ハ佛法を疾む心強き故ニ聖道の仏理ニ似ることハ皆悉く破滅せんとなり。此も又多し。貴殿も又今我一切の禍福ハ皆己れ引て孟子の語を解きこゝろべし。因らく悉く己れ云ひ出すと得ざる者。針を打ち人を咒咀するも一心の感通ニ依る。或ハ人の眼をおつぶし或ハ足をおやまひ。或ハ命を殺すなり。此をしらずんバ眼を打つと全く違ひ

足をおるやまひと横槌も。命を取殺すも刀も外ならず持ち様ニよる事ニ非ずや。其中ニ取出す物ハ非ずや。又吾事に引て云ハゞ鄭国ハ奚ニ詩ニ雙鯉と出ハる者なり。辭禹ハ本と王位をつぐべきニあらず非ニ。匹夫の時なり仁徳を積で。四百餘州の主と成り。堯ハ此なるもんの例をみて孟子の文意を見こゝろべし。在我者ハ仁義道徳のこゝろ非ずや。功名富貴ハ皆在我者ニ非ずや。あゝ決定の文字ニ萬物皆備於我ニ矣とこそ。若し我ニ内ニ向て求ざるハ

ふ向よて諭阿或ハ種々の謀計を運らして求るもの
求めやうの為方ハ栗箱もおなくなれども天命の許し
ぬれバたまる事ゆゑ成就せぬものぞ故ニ孟子乃
次下の文ふ求之有道得之有命是求無益於得
也求在外者也ハ意ハ功名富貴等ハ外ゟ
やうなれども。内ゟ求まじ得らるゝ筈あり外
ふ在る者とんだ外ニ向て務を求るハ浮ける筈を
とるやう
さて又取りわき示をるゝとんを領けて
受るべし。ハ聖人の書一字千金ゐる者なり。
其中ま易経ハ天地鬼神をわひふくろて作り。
たまる者なれハ一言一句ゝ其賞罰利害の
芸ゞ恐ろしくて者ゐ。其易経ハ曰善不積不
足以成名惡不積不足以滅身小人以小善為
無益而不為也以小惡為無傷而不去故惡積
而不可掩罪大而不可解とそ。ハ意ハ人ゝ平生ふ
おこづゝの悪さのゝしるまでも忘るまじ。永仏も
ゆるしのなれど。輙ゝ為るまじ。況や奥の
繁ゝゞ煮殺し。焼殺して。おくらのまして蚤蚊ゝゞ
殺をゝゝのゐ。其ふ親兄ゝさゝらひ。朋友
妻ふ着属の間ふ霊して事ニつまて恥
さゐ多く若きゐゐ。ゆゑふ易の文

意をもつくづくこんまとべ。此等の小兒をも一ツ渡へ失せだんて。扨く猶ゝ續ゝて大家と成て。一ツ家をも滅さゞるこそ。さて又若ゝ時の若事へ。何の祈禱もなくいろ〳〵に思ひくらして行へば段ゝ大いなる福徳をうけそこせ。又同じく易の曰積善の家に。有餘慶積不善の家に。有餘殃とこそ。此等の亘文の意と全く同じ也。能く〳〵考へ語也。扨上の文をよく〳〵考へれば豈恐るゝに非ずや。

とゝ

雲谷又子に向ひ。彼老人向きの一生涯を。

占ひ極められるゝ〳〵所くへ望るゝ一〳〵ト實されとも。能く〳〵考へ右老人の占ひ未だ定まらざる前に語りせんべ雲谷逐一實なる易者にて而るを其老人のつゝしみ如く登第も高も滿なごとく壽の命も又十三翁も拙て予が眼に入ること如く修行又周く天命を樂なんざるや否や予芸術に長ぜざるを以て固辞ゝ示しの趣ゝ甚深至極となごとくも拙ゝ未だ意得ざるゝ何者んて高發よ登ゝ

人をころす大底皆福相あり拙者も福相を備へ
しと云ふを信じて福分を種勧も成がたし
そもそも生れ賢として其の中の世俗の忍びがたく又
人の非をとがめ悪しきを憎むの心なくして或ハ我が思ふ
人をうごし或ハ我が利にも妨み愛相捐づるを以て此等の類
皆福相なるべきやうの器にて仁心そなはる
寛容や且又高遠の理をもつて
推察をもて拙者が拙くるをおぎなひ細數
くのうへ一つもそなへ地の徳なるべきこのうえなく多
く草木を生ずる清気をうけ異なる拙き者

ものくきれいなどそなへ
ずうき是よりつべきを拙者の基きこゝろの
きこゝろ小言こゝ徒労拙を書育ること如くくの人を
小福和るゝ多くの人をとるも書育をれ者ゐれば天性
とみも仁心おもきこゝろ拙者が秋をなこのま
木を吹もき拙を附ての
福和の気象あき者ゐれば
れ人ぐゝ泳ぐべし三こゝ悪ハ天地のこゝろにて拙を
生るの幸ゐうへ無慈悲ハ殺生の根ざしゐうへ
拙ゝ人の如く平生の行状と気ぐゝもれ高
ゝ十人の急難をこゝくもくぐゝをくぐゝく

此ふまう彼こう媚てまそ
るまを甘どと此等天地意
おべくさる及ぼるう四こ
るうとまろる時ハ孔もろ
かワざ或ら言べきき者
者ハ性なの如く子生多言者ゑれ生まもかか
うこんに己をず生まさくおき者るしバよなど生を
ぶ化生まハ物くのりべうくぎる及ぼう五こおく
大酒して腎精をうかく毎夜ゑがとれ
てえまお神を保事書もろ事をなどで此の如きお
皆よのりべうくぎる及ぼかとなどるうおそ後の

過ぬべくおうこんぴ是をべく方夜の望
もをおうるりまに曽てべく覚東なくる
るうこと等ふ

雲谷知と含んく回なるるどりくまうの唇相
うてハ高第ゑも登こどみよも並きこうなん個
叫るものうやこだ世間百金の孔代千金の子代或
ハ又十代績きみ代二代績くべれくの生れお
顔の主教のりくぺ矣ようへ實て多毫の指引る。
き者るうぺ分る上ハ足下の如く天命れおち住せて
うううぬ足悟なのるうぺ而るよ義よ一つの要
論のうう。尊ふうよのあくえ元そ世るの人のきく教化

ちぐさ[illegible]ち。己もくが非を知[illegible]て[illegible]るも但
己れのこと是そうと思よ放う。足下此の物語る。
一々人の私[illegible]く[illegible]ふく[illegible]
足下へ毛頭も隠さゞ。我が非をくら[illegible]
を全く足下の猫相を生ずべき業表也。太甲れて
同く天作孽猶可違自作孽不可逭と[illegible]意
へ天令の宮[illegible]て受[illegible]れ孽ハ務方ありて逭[illegible]
自然うの作りたる孽ハ必逭[illegible]ず。此
裏かれた生来打ち[illegible]の福も。務方悪しけれバたちま
ち冥加よつきて猫を受[illegible]う。自ずよう務先
ゐる猫徳へ天神地祇の冥加ゐる[illegible]。悪魔邪神

も奪よう能わう。彼老人が足下を生せを逐ぞ。
ゐもやくつ[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

即時に改悔して。今日始て生れたる心地して。今より志一決して。ひたすら如来の教に順ひ奉り。以前の悪業は。今日を限りに。悉く消滅する者也。道徳再生の身となる者は。人間は勿論。鬼神も。必ず敬ひ尊ぶ事也。貴殿其再生の身を以て。徳性を堆養し。積善の事を勉め行ひ。多く陰徳の報を積まば。天の上帝より。再生道徳の半減の。是までの汚れの半減の。天命を取て捨て。新たに厚福の相を與へ給ふべき。ひとまを易経に。只ト筮の為のみにあらず。君子の凶を避て吉に趨く為の聖模なり。若天命一定にて不易の者ならば。避くべきやうもなく。ひたすら如来の教に順ひ奉るとも。何の益かあらん。只皆聖賢の格言なり。半減の善を行ひ。積善の家に余慶あるの理を。信じ行ふべきを勧るまでの。教にこそ。予此書を著して。生を益ある人の為にせんと。筆を執て。日月を経て。漸く脱稿す。即時に佛前に徹して。退て我が一生を認め。先非を悔悟して。後善に遷らんと。祈誓す。若事三世の因縁を信じ。修行精進して。登仙せんと。祈誓す。足ふみ。雲谷禅師。欣然として。功過格と云ふ帳面を出して。予に教へて曰く。自今以後貴殿乃。日々の善事を。毎日此帳面に記るべし。

ろ一ぴくども而つ川ぺ若而つき合せく
假べ若三つ有て。悪二つ有〳〵バ二つの名をこゝへ挙
て〳〵一若と記さるべし。二千條と滿ると内ゟ本願ゟ
不預ゟ。決して成就せべきゟう。雲谷之子に教ら
まて同元を古への聖者のゝくを教ゝくんのひとを
身の行いと。二つの教方有ゟう。上根の者ハ直ゝくの
ゟひいを用ひ。下根の者ハ先ゞ身の行ひを用ひく。ま
り無とくんの行ひの不くゟもひるなうゞくまも
せの人ハ多く下根なれバ身の行を尊とゝ有ゟ
ゟう。而れども中根ハ才識有る人なゝバ心の行ひの
話をる。一と通りヤ二通りヤ三通りヤ有ゝとべし。孟子曰。夭壽不貳脩

へ。ゆくゆくこそきそもろう。此の如くむ臺のくぬ地を。
虚空の如く無念無意にして置て而後
み徳を修ぐら。耶ち自求多福のく也る者
と雖へくこそう。一切の草木ハ種子より故ニ生
ぐる。色〳〵の天命を抛捨てられ仕方そう
種子を虚空よおいく草木を生ぜ給へ如く
もう。さて修身と云ふ事ハ種子の破損を修理をそ
して。舟の底の破損をなして功徳の結末をなして修

理ぐる。右の如く。徳を修行された。
己をそこぐだ。又天ぐう書命を與へ申よう。又
富貴を與へ申よう。甚外一切の望そのを授け申
う。ゆくゆく何の望むそを記さず後ニ天乃次第
の意形して居る叶へ。自然と一切の不須法是をれ
もう。是を候之と云ふ。元そ人の須ひ給ふ中う。
壽命ぐう重き者ぐるを。一切の須望ニ応ぜ申
者もう。右ニ立命の説を。ゆくゆくめぐる
又道ハ御存を書く秘伝ハ聖道の幸深く知ぐき。
ぜして書たる者へ罷神ニ知ぐくして。大切ニをれ

るのあり。甘く書きさうらへ。筆を執て存を書く時諸の雑念をお捨く。一塵ずゞの念を記さゞるの一弦を書きさうらへ。一塵ずゞの念を記さゞるの。大壽不貳。とゝ文意と。山道家の忌不動乃と味をおくべんのおひをおく。古今を會得せらるべし。さて舟のおひとゝ別のるゝあるべし。別の者と念を施し。衣を與へなどさる底のるなるべし。かうのるゝを行ふ者の悪んよりるべきやうにをけれども心のおひとゝ云者と比ぶべき。

垢多し。今ゝれ来り居ても未だゝのおの場所ふるゝあるゝを叫れと周く甘く代りよるゝと教ゆべし。夫我が衆の準提陀羅尼と是を修ゝる者も個況在一旦の衆業を滅ゝるのゝみうらを過去無量劫来の造衆を消滅ゝるゝ甚文曰く曩謨颯颯多南。三藐三没汰倶胝南。怛侈他。唵他唵者禮主禮準提娑轉賀。ゝき感この咒を平生間断なく教をも、ゝゝゝ唱へて後ゝ虚空を相の代ゝゝく成て半夏日ゝ不作の若ゝの如ひ行きて神明を感動ゝゝゝ實よ走ゝ

馬祖もちをかくぐきそうしてやうれき。
○仏書曰く又那謨薩達摩。芬陀梨。佉素怛覧。
とくる秘文あり。文字より随く喝ふべき者く。
文と称くる事萬くるやう。縁に随く喝ふべき者く。
予始へ學海と号て雲谷禅師の玄令の説を
受て勉ち一人をもべ茶の学海ハ已ふ
死し、今日の我が身へ再生の身これ学海をも
予が化と改ち。此意ハ此ときでおさ一代人の旧里よりやら
てかうしるもと予が幸の人の旧里よりやら
うれとの誡の為也さてそ予世の中にうけさろ事なく。
あくがうさ不管せしが。一度雲谷の教を得てう。

行とそくそう悲ろしくく
てもうかくもくこくバ鬼神の栄の内ふ独り居
ふ思てふハ公ハざくくうどいふ事くれんをくぐうしよ。
哎てふ世の欲深を捨生でく。天道ぢられ給ふ故
ふやふ弟くふんもち大ふ恢ふそう。
又ハ謗られても。事こ苦ふるるさやうれ給まう。
兎角して芸那年一
一生そそく時老人のお言ふ選りくふ
打誠く守一ふ選び生そうしてぱはそくや易道の
信仰ふそうて禅師の玄令の説を性よぐようにて
学くくうう。然もとども。猫我が身を者ふ誤る。

願る多し。或る事に臨んで。行ふべき義をうたがひ。或ハ身ニ勢て若事をなさゞる。口ニ非言をなす。或ハ解ざる所ニて大事を思ひ放逸の事もおのづから出れバ困て若事ニつまづく。是ハ十ニつあれども。要ずる所十一ヶ条ニ過ず。故ニ己巳歳ニ立願して。己卯の年まで十ヶ年の間ニ。此ニ十の若行やうやく調ひて。庚辰の年。性空上人悪念多きゆゑ。東堂の禅堂ニ於て。空らんなどゝ請待して。千善の供善をなして。天地祖先の徳ニ報ひ奉らんと

此ニ又子をおもふ願文を挙げて。二千善を行らんと拙き願をおこし。多き費ゆゑ。又子孫を助けん。或ハ多くの人ニ施し。或ハ鳥類魚虫の。生ものゝ物を買て救ふ。其方ゟ母へ孝ニ。して行らん。故ニ若を行ふハ但朱筆にて○印を付ん。此の功ニ一日の内ニ八十ヶ所○ゟ多ゝ。是ニ困て。奨ニ来の年八月ゟ初て。庚八四年間ゟ二千乃若行を満足せり。此ニ法上人を私宅へ請待して。二十の若の供善を勤めん。甚年九月十二日又

衰人ヨロシ安ラカニ祈ル。善事一万條ヲ修行仕ラントテ。我又一百年ヲ加ヘラレ甚年ヲ享ケ申年目丙戌ノ年江戸ニ寶坻縣ノ令ニ入ラル。其ヨリ仰セ付ケラレラル事ハ物ノ幸一冊。治心篇ト名ケテ認メ差上ケラル。ソノ朝ヨリ七日ヲ期キ。裝束シテ表向ノ座敷ヘ出テ。我ラレヘ小性トモ右ノ治心篇ヲ持テ。皐ノ上ヨリ垂下ル。ソレヲ一ノ字ヨリ敬ク記シ。夜ヲ宋ノ趙折ニ致ク。ソレヲ皐ニ載セテ。庭上ヘ出ク名ヲ焚テ天ニ向テ上帝ヘ申上ラル。是ヲ毎日ノ格式トセラル。今ニ到ル迄ヨロシ。或ル時ニ方ヲ冊

予ヨロシ語ラヤウハ第ク小宅ヨリ新ニ建ンデ。ソレヲ淸淨ヨロシ。ヨロシ助ケヨク。善事ヲ行ヒ。善事モ。救ヒヲ施シテ成就ヒラル當時ヲ行ヒ。彼ノ堂都ヘモ同ヒク相關リ。ソレヲ以テ彼ヨロシノ事ヲ仰ケラレテ。善惡善惡ヨロシ。ソレヲ八萬條ノ善事。ソレヲ施ス事ヲ。ソレヲ悔ヒラレヨ。ソレヲ悔ヒラレヨ。ソレヲ悔ヒラレヨ

門小金かくんくらくて平生をつ月て考るよ余ぐれ
分一町より分きこ二分四厘七毛ずつしが此差の苦を
変く拠百姓へ頒を流して今年より一節を減して。
一分二厘ごもと定めるう。然をども差よくこれ
のこのるもバをれどの大若よ拳事うや
蔵ぢるぬる事と思ひしに打苦又基の幻余禅
師等うのう。予甚ご喜んでは下をひしべ禅
師の曰く善心真切をバ行も萬善よ勝るるあ
り。寶地縣百里四方の内の百姓よ一節の粋を
減し頒る功徳をれバ豈萬若よ勝らんや。況や爰
中の告と守れバ天うの告げ更うう。何の疑うあんや。

とうられうう。予教を蒙りて。(脱)
ぜんよ吾教多満して。
打く衆僧一万人をは供して。右了吾の供書を遂げ
うぐて九の老人ハ予を五十三歳八月十四日丑の時よ
死をとうう。予敢く喜命の術々終う豕ズ十
三業の内行の頓もるを。聖人の曰く。天難
不于常と云う。足う吾ご依て定うる生れつきの天命もこそくの
祥為不善天降之百殃又曰作善天降之百
と云う。足等皆己ご依く禍福無不自己求

ることつゝ明證ありと皆聖賢の言ふ何の經よ
りきたるものゝ〳〵んや。況や予自ら飽までも味ひ且つ嘗て
思ひ知るをや。今ふたゝび八一悪の經ひもゝ。彼の天命
八一定の者ありや。命若し改むべくんば豈天命といふ
くんやなどころに天命の後に因て改まり定まるものと
知るべし。聖人の教ふに従て即ち改むべくんば父母祖宗と
いへども改むべし。さて又甚方が天より受
信して得る命教に依る。若し之に背く富み居るものゝ
為ならとせゝ若又行事も甚方ら
思ふまゝに行くも叶ふまじ。行ふまじくも居をらんや

しう妨害などのあるべうかとぞ思ふ。若又代ふるに
べき者又代ふるを安く若しからずして極く貧乏人のふ
りふるべき。若又人よく愛し敬ひて即ち我
を行の儘もなくして。此敬せられる人勿體ある權門と
なりと思ふべし。若又威勢ある權門と雖も畢竟は
退の思ひをなすべし。若又学ぶ次第ふ弁進して。
高世ふおくれ人ともなるほどなるべし。ふたゝび
思ひ設くべし。そもそも先祖の徳を輝やかすものを
思ひ。ふくんば父が意を補ふを思ひ。よく國の恩を報ひ
ぜんとすると思ひ。下ハ家門の繁昌を願ひ。外ハ人の急
難を救ふんとすると思ひ。内ハ己まづ私無きを思ふべ

るを見ては日々に己れが非を知り月々に己れが多過ちを改めよ一日己れが非を知れば一日己れを益する者也と聽よ同じ一日過を改めざれば一日益なきなり天下にとぐれたる学者多くとも自身も徳義を積んでも人にも広く教ふるやうにとても一生の間悔る事なくして一生を送ることを得ん天命を畏るる外ふだん定めたる事をも天命かるると知ざる者ぞ愚なる禅師授くる所の三帰の說ハ至精至遠至真至正の理なり謹んで慥に楽しんで勉て行ふべし日々くる日とくるとなれん

謙虚利中　後ろ

人をも利して自身中に「抱もかゝえ」ても利中とハ中ると云ふ事なり凡そ人形ハいろ〳〵ありて其の人形ハ色外よりうごく者ハ色外より来ると第一ともよりうごく者ハ自然とよろづ其の通家の虚の字とハ大いに不同ありて内心高慢して形と口とハいつぱんらしくそらくしき者ハ内心の通遥する者ハ自然とよろづ其の人形ハ内心ハそう動して形とハとんでもなき事ありて内心ハそう動して形とハ不相応なる事を畢竟勝ちたがる者ハ内心ハ勝と云ふ字を畢竟勝ちたがる者ハ内心ハ勝と云ふ字を畢竟勝ちたがる者ハ内心ハ勝と云ふ字

もろう利根發明十分ならずと思ひて自滿をし人を侮り遺人八減き者よ驕り富る人ハ貧者と聽ることなし皆盈の字の意ぐ。謙ハ即ち謙虚のこゝろも地のごとく滿てハ虧けくをる。日月星辰の運動水の東へ流るゝのごとく陰ちハ其位大山を崩とも河ハ丘とならんど。皆貝あのこゝろざして人乃のる惰を悪んで謙虚を好こ愛をる人情のごとくてこゝろ及ざるものう。但し鬼神ハ幸福「謙」といふのこゝろ盈而福「謙」といふのごとく乃ち鬼神ハ幸福あるこゝろをもつて学問のよろこぶ。

仰げバ限りなき者ハ空ハ也。俯してハ際なき者ハ地也。然るに空ハ地を九おゝ花ふ物をてそこへ入る者ハ必ずこゝろをあるそろう厚むるこゝろのよろこぶ。よくもろ化ふ物をする才智藝能のよろこぶ必ずこゝろを仰けバ限りなきこゝろをもつてざれ共よろこぶこゝろ。さて才智藝能劣れる人へ我々不調法者なりと思ふ故ニ自然と謙退して惰の人をなる人及て有徳の人と對をれバ劣れの身こゝろにて有徳のこゝろを仰ぐべや。中にハ豈大いなる悪徳凶悪なるにあらずして有徳なる人の家居衣服をろ

ぎう。遊興飲食ふ華靡を盡して貧ふ人ふ驕
ㇾ人を在にして自ら樂ことふ人くの常情ふ
きども。神明の方ふて大いふ惡ふ人くの富貴ふ
世の人の富貴を積ふ大の跡を極て。榮華のふ人
を罪下にて見下ぎさんが爲ふ人万人が万
人皆ふんなふ人ふ惡きふ人ふ書経ふ
ふう恥ずけふ。滿招ㇾ損謙受ㇾ益ふふう。ふ
鬼神ふふ人ふふ惡ふ者ふ天地
ふするのふ出ふ。然ふ。ふ
故ふ我ガ惡ふ故ふ

ふ私ニ曰計倩くんぴ法國の役人三年に一度づゝ好く多用にようてるみりぴて次くよみ及筆ニ誠こらくし法生をくリにれてとらるゝう討ハゆ用のことん。偖いつまでも偖とうふく。嘉善と云べう。予と同時よと京せー諸生十人ゐり其中よ

○丁敬宇八年も爲もがうくしぴ生れ贊るく謹虛ゐり。予費錦坡ニ向く語ふぴ丁敬宇八今年必ず石生されん。費沛坡ぴ曰く其下位をつくら知ーや予ぴ曰く我宇ゐく古へう謙虛の者ハ能く天の福と受るとくう。所謂位く十人の中に敬宇ぴ如く愉く勅くして。真實ーてことの和ーうふ内ハるる者有ーや又敬宇うわく恭敬順承ーてうやまひたくーみてくをそゝちぴ。小人謙畏ーて物事大事くくして。

人よろりくぴう。予ゐる乳くぴうーとぴくもる者ゐりやぴ受侮不吝ーそぐくよおるぴうくぴうーもられても。其正報ぐーしもるる事くぴ宇語不辨ーてぴくよそーらくを宇ーて。我らぴ如き者誰もろそーらぎーんやそぐのるゐりとゐいたえてぴーも云い用きなてくハせぴるゐり如ハるくふの者と矢比岩神の助けゐ放ぴお年決ーては度ハ左身とて在る也とつひも采ーて撰び出されーう。

○馮用士ハ幼年の時ハ佳ろぬくぐの者ーそ有ーぴ予丁丑年京み上ーはハくもやる宿よりーはハくもやる宿を居もう。予不已彼ふ已いーぴ陰く交遊ーとべ采

して。幼年の時のくだ〳〵とを。大いにお遠くて。
謙虚者とてなりきさ。

○李露岩は予うな友とそんじ〳〵。諒なるものり。
予猶試んとおもひばくの如くいるをとらく
設けくもってそうまさ。磨〳〵めけるふばく面色微
塵も褒だぶる極厚なみづり。真實よりひ更けるり。
予う曰。福のまるも禍の来るも。必ず表れてせあり
つく〳〵者とり。今我が足下を罵辱せ〳〵實に試くなる
るり。然るよ足下必ずを今年五十倍せり。矢の如
必然るり足下必をを今年五十倍せり。矢の如
果して予うひ〳〵如くさ。

○趙光遠は山東冠縣のくて。童年の時々学よ
ねく撰び生もしくるくそ父嘉若とそれの。奉
行とりてりく付。趙光遠も父よ随て嘉善へりき
くるくそれよ銭財吾くる先生なり。趙光遠往く
知るくよ銭子旦つ自分の文を持来して見せれ
ふ銭財吾発もうそこの舎稼も毎く。筆ををてを
文を教ふ直して反古のやうれもり。なをとなる
るとりり。光遠の底の者うべ大いよ立腹をべ
光をおしも怒りの氣色もの〳〵うべ反くよ。
喜んで。芸まく直しの通りふ改めり。くの謙
虚者故りやそ。芸年之功をり。

○壬辰の年予參內せしに貢士夏建といふ生徒
み其人ぐら甚だ卑下遜退して眞實顏つきの
予友人と倍く同くして元を天うる人と稱へんと
きるは八箱を與へんとして先づ姓名を問ふに其人のいだて
も答せざるもの多し老えたるに姓名なきもの如何
侯の者八勿論然と實貢額の顏たり。
人爪の者八俄かに此と氣づきをやうへ初父兄をも親
きもの仕升をも敬せざるもの多し丁
寧信んぢ我るべきの類なり。今夏建の風來と
して選ひ出されたり。

○江陰の張畏岩八名うもき学者にして文章の名
人なりし午の年南京の鄉試の時文章を作
て出し極めて第二第三とも下るまじと思ひて其
ゐ或る寺ゐ寓宿して居まり其日に書て擲り榜を
見るに第二名なりき。張畏岩の張のみも
なし畏岩大ゐ立腹して其時の刑者と睦月の者と
して敎こゐ勿せり。ぱゐ二人の通人を在ゐ在て笑
止千萬八せんして反て喉をそやうして笑ひ
通人ゐ取てうこ。汝に行の故ゐ無きやうにと
人の曰く我ま是下のやうな畏文者にて。ゐ元う
及第を汲ゐやうとゐ畏岩

くは膜をとえて妙ハまど二面の如く人ゐ水ぞ幸ようゐ
予ゞ文をつくる事ハ好あらぐゞ行故ゐ妄ゐ思
文ゐりといふや。道人曰く文を久ゐ人のゐと繪きゐ出
を者ゐゐしべ仏者の志ゐ氣溫和ゐて七情ともに平ら
る時ハ甚ゐ文自ら林に成る者ゐり。今足下の射者
とゐいにせらく緒亂を考ゐ足下の猶中甚ゐ幸ら
ゐりぞ。甚ゐ不手不公のくと繪きゐ出ゐ文ゐ
ま、ざ足下の文をつくざ已ゐを下ゐ文なるくを知
ゐりくといふゐれべ畏ゐ道人本座の者ゐ水ゐと
とゐてぐゐりと我をおりゐ道人本座の者ゐゐしべ一言
足ゐ。俗ゐ言と改ゐ足ゐ今の禮をハ免ありて願く

ハ慈悲の教を垂ゐと。謹ぐ下ゐれぐ道人の曰ゐ弥室
くくくまりゐくとそを足をヤべ一ゐそ人の
身のとへハ一定の命數あり足下ハ度撈ゐのゐき命
ゐりべなとゐ文ハ拙くまゐ撈ゐ足下ハ度撈ゐのゐき命
ざくき命ゐりべ足下の文まりゐぐ巧なるゐき文
まりても撈ゐ入くぐゐ撈ゐ入ることにゐる命
ありゐ。文まの若悪ハ二の次きゐり足下若し出世
ゐ志ありべ文のくれとそ出ゐゐ。畏ゐ曰已ゐ定
の余ゐりゐれゐ出ゐゐ下ゐゐ周らをと
云ゐぐゐや安くして近くへきゐ先生行ゐゐ改
めよくゐゐや。道人曰足下望ぐゐや造命者ゐ天

立つ令（者は我也と云ふ意は令は我より遠き
をも云者ぞ。遠きにて成就（なる）ぞ。天つ卯可
しと甚通りし宮やうやうに成ぬるを。天命と云
づけたる者ぞ。實は我と天と二つにはあらぬ非ざる
る也云々辭言へは小事を大事に改め造るが如しおれを
造る者は大ぞ。大いぞ。大いぞ。材木を伐る者は我ぞ。我
木を伐ぐる者はかりぞ。材木の小事にて一生を過を
是れ生来一定の天命ぞと云ふ。若大事に改めんともする
者らんど。我木の用をもとられり。材木の大小は依く
家も随く天より造り改めよ者ぞ。小辭言とは
云ぞ。天命ぞ。後若事の材木陰徳の材木を

集めよ。足下の不平のんを改めて。謙虚の材木を
積集めて。是までの破れを家と打棄て。新たに未門
高客の大宅小造り改めんと祈りぞ。天乃造化
の大立岩改め造りもへぐ〳〵んや。天命一定と云ふ。
某をうくて某をは至をうくて至をは某をうくと云ふ処を一定と云
うしてる者ぞもろもろも天命の程ぞをう回るをのは
我を囲て天命と云者は我が一人の言葉ぞ。我
度も天をうつ一定をう回まは。天命ぞ。
某と改めて。即可しと云ふ者と知うべし。天命靡
常と聖人のつしめをいける。ぞもろ豊岩門御教へ
ぞ極ふいぞもろ〳〵謙虚へ改めて務むべし。指ぞ

儒のまゝ物を施して陰德を行ふの術なども知らず如何
人曰く善事陰德なりと雖ども如何道
個んの交用に依らず自然と施こされても限り
因くんの交用に依らず自然と施こされても限り
ひやうにして世界の中に謙虛の一事の如きは
とつくと呂人ふ物を施されあつてゐる謙虛
慶くらべの事方ふ言ふてゐることを要をとらわず身つゝへ
好衣と蓑はよい心海の底味と食ひ家居へ奇麗
美食をそろへおきくらべ頭髮衣帶と飾華ふる物
を懷中し腰に佩挾用ふ人を呂人ふ耳うく
源義をまもり一已をまもつて敎ひつゝまとつ

を外一切の法乃至異ふ
とをげこ爭ふべ情慢
ふきる細かくをく
十世間の人天鬼神の
のうらを謙虛とつ
人うへ内撓くと却
の恭敬を至德と
ふるの人も謙虛を
ふの人も隱を佛者の
會通と行てを食
をつるのなり困て
食をべき身分の者一日

甚だ味を世界の人夫に畏神へ譲り與うる人或は
又好衣と衣うは衣ぬ人の。一日も好衣と著せざれば
一日も好衣と世界の人夫畏神へ譲り與うる人或は
るこの大宅をも建うは衣ぬ人の。大宅をも建だて
て小宅に住をるへ一日でも
年うてもそをうをにぐうう
きるをうらくるへ甚つる
へ譲り與うふ或うなうう甚
るをきうを止めてぜぐうは
譲り與う奉うう成う者を
千銭の費なくしてを施約天地の間に滿るう

故に孔子も至徳と称めたり是下行ぞうやう
の大道を知るやこの行ぞ已まぐんの悟悔と改
めむとして哀りふ刺者をを出ることやとつくう畏岩
此を覚て大いふ感悟し。能くう善事徳行日々に修せう
のんの垢と洗ひ捨てぐ若し丁酉の年にして或る衆不思議の善をうんとう不
圖甚だうきを造うの家ふあれう。を内よ試錬と
て彼の夏冬の時のんの別決第舟の帳面一冊有う。
畏岩此く披きこれで処に名のぬいてうるをこ行
きうるんふ思議ふ思ふ小僧のんふ向ひけるこ甚
んの日天よ拾くい撫でてんの間日こ系位のこを恵

盡く記錄をとるやうに甚中には及第の一句ある人ごとに一度づゝ考校あるべく間ゝ及第をとゞめ置者ふりて。德を積ゝ善を行ひ皆此帳面のごとくせば及第をとる決定なるべし。名のうへに及第の二字を附ざる内は一行も德を損ふ惡を削りとつたることゝまの方の名の下へ書き二行を指て云汝二年以來勉強の功積りて頭角を顯はすべし。汝の姓名ものせらるべし。猶ゝ務めちらざるべしといふ事を書て其中の帳面の次の年の郷試に第三百五十名中に載ざれば其人の名の下へ一行を指て云汝二年以來勉強の功積りて頭角を顯はすべしと

会ゐ天ふ通ぢてふとふつて佰読も志ふつ著つ開新
ふてふけまこ心ぢと事をとう楽
つ孫ぞ心樹ふ根のかりふ如くう招かて書言ふれ
べ終ふ不大ずとふそふ好くこ故・生空と我ら者ハ盤
石の志ととふく会ゐ議虚ふて幸ふ物ふふ行ふ徳
を積てず天地鬼神の意ふ合ふ天命を造ふ比べ。
今の及ぶまと我ら者ハばふ板ふ秘ふう
真の志かるに邪を。但一時の勢向ふ佰くえをく
出ー誹諧お句の黙をふ如ふまうのうふの
うて出ずそうもーたもう。孟子の曰く。王ゝ好楽甚
齊其庶幾乎ばんい音楽とこ云者ハ今時の楽とふ

ちぐひ古くの楽ちゃもそ音をつるく虚空ふう
弾ひてう。奥もとどう。鼓も打ふ。鬼神を感
格ふ。天地を感動ふもうぐの仁術ふる者う。
古へ天下を治るに礼ふ楽と二つの道ふて
太平にかうふ事なう。然るふ齋の言ふ楽とぬむ
根ざかう。若此根ざふを書ひ育て真ふの古楽
を好むやうに成ふるもう。天地鬼神の助けふ依く
齋の圀ふ四百餘州の京ふとふ楽とふるふくとふかんとう。
予此孟子の言ハふ效ふくも。但謙虚の一事ふるもとぐ。志を公ふ
育て謙虚と好むる甚ふ絶ふ天下の宰相

句の位ヲ含ムこともくろうんして存ずる也。○私ニ云。自
今の一人ヲ謙虚の一行ニ固むるハ。天地鬼神及ひ
人間の神魂ヲ感動ずる処ヲ知ざるして。其の
孟子ヲ引く牧ノ誓の易の聖語の処ニ結帰也
ともいふべし。

積善ハ篇ノ名ニ其の趣ヲ述しもの也。○積善之家。必有餘慶ハ。人上の陰ノ実
也。如くハ積ざるヲ積めバ必ず後多の慶ひ来ル象ニ
の徒ノ云ふ。昔魯国の顔南といふ人娘三人持て
ヲ其内一人ヲ孔子の御ノ叔梁紇の妻ニせんとて
三人の娘ニ告ル也。叔梁紇の先祖ヲ代く賢人多

く出して。積ざるの家也。叔梁紇年老ひようとつく
ハ人の妻ニこゝろべき心懸ヲ告ル也。○徴ハ
在とハ娘ノ名ニ云ふ。○顔氏ノ女ハ叔梁紇の妻ニ
やつて孔子の母ニこゝろく。○徴在ハ顔氏ノ女ニ
つゞ。○屠士ノ家ニ云ふ。○第ハ次ノ
ヲめづらして其身ヲ卑下ニなる也。○其子孫ヲ勧の
家ヲ治る事ヲ云ふ。○挟ハ。○結句ハ外ニの臣下の
ハ大いニ謙虚ニして徳ヲ積ニこのゝ叔梁紇ハそのゝ孫ヲ
代く謙虚ニして徳ヲ積ニこのゝ叔梁紇ハそのゝ孫ヲ
ル故孔子の如ク大聖ノ人も生ニこゝべきやと

あふして。微在の父顓甫の物語りもそうである也
家語という書もそうである是等を考よ
次下の帝舜の二事も積善の家に餘慶ありし
中よい古今第一の冠頭なるべし。故に今篇首に引
出せとく孔子帝舜の大孝と說て曰く。貴為二天子一。
富有二四海之内一。宗廟饗之子孫保之と。
帝舜孝行の大なる善を積るゆえ故。天より四海の
天子となり。崩御の後も衛子孫繁昌して代々
子孫の祭をうけゆえよそこそ。此等を積善の家
に餘慶ありと現證なり。今又近来作者の往事
とくく。積善の家に慶あるをおもふべし

○建寧の楊棠という人。先祖より貧家にして代々
淡泊にして家業をおこたり。或は大あめ久しく續て
溪水をひたしもらし。或は洛水よりも水出て家の民家をおし流し。
うでう流るくもあり。或は人も救も知ざりう
うと哀れのくらしなり。面々人の用もたゝ
ず。資財道具一ツ障子材木等の類悉くひろひ
もとめ。ふしの楊棠が曾祖父より祖父の二
人の親よりの板の結おろしも日をうけて。但身
をなげうつて人をたすけ助けまもり。俗のくらし
指ざしもせず。馬鹿者ともそしることなし然る

こと能く仕合ふ故に楊栄が父のまうしつる時節八餘ほど卯ともうして慕せうとうの或は異人来て楊栄が父に語らふ。汝が祖先大いなる陰徳あるが故に孫なと尊貴きこと〻なるべし。楊栄生まれんで果して二十歳のはつやなる年に天下の極官なることなり。升まうのぼるやうに及びて没したるの祖父も。皆祖父も皆贈り官して先祖を耀かしたり。其子孫又皆歴くして而も多く皆賢者なり。今の郤克墳ここなる塚に彼まうせし祖の墓なり。諸人のあつまうでたる其方ともも知らざるなり。

○楊自微と云ふ者は鄭縣とうの人の室の巌粛うの下に

吏みて其ぞに公事方に付て偏頗うの有なり。或時巌粛一人の罪人を捉ら。血まみれなく怒りの気猶盛んなりけるに厳粛同くは者安き法度を犯し其とき我が道よき筋とうれ非ざると答ふ。自微頭を地に付けて同く。傳へ聞く古へ王道の世なりし最寄くは師也と立てく聖道を教へる故ふ民く皆正直うして法度其教へ方を乱る故に百姓正直の道をわきまへ。其の法度を犯さゝる人の言へるも聖人の言へるも罪人を。吟味して。假令罪人を落ちうけ不仁とは思ふ

べしと柄こそ思ひて喜べ
戒のごう而ることを忘や。怒りのみつべきや。恐もうのう
らうる様とも覚へどと言べと盡してやけをべ厳
粛も道理よ伏して物うの氣わるぎたうぞそみよ
自微たやうのんだての者ありべ賄なども決して
受ぞ。家又ん衆負なれ牢者の内て朝夕
の食物のえき者えぶ食物をえうう
て懐ひごくめう。或う自微ぞ家わ節飯
かう。甚ご飢よ及べら極ふなう。自微ぞ家わ節飯
米えよて。罪人よ食と喚んとそれば家内の合物
なーつぐせんと甚妻ふ捐彼ーそれば妻の曰く罪人

公宿の近き者たるやえを方の者うや自微ぞ曰
抗とう知ようまもう
飢つれく救色皆薬の
妻も哀をりうよて。
て。陳よたもて罪人ん合へーめうぞ平生の善悪名行
皆ム のやうの悉きうぞ然うふよ自微二人のよを持
てう。熱伏宇陳ハ北京の吏部侍郎と成り次男宇
亂ち南京の吏部侍郎と成もうぞ二人の孫を生
ぶて。一人ち刑部侍郎と成り。一人ち四川の廉憲とふ
もう。而も四人俱よ名ちと称せられく各うち抜
て高官大祿をけうぞ。

其子孫なり。

○昔正統年中に福建の鄧茂七と云者亂を起し汕縣と云處より起りて四方へ蔓りて此よし隨ふ者甚多く數百里の内へ蔓りて此よし隨ふ者甚多く數百里の内へ蔓りて此よし隨ふ者甚多く數百里の内

者ハ曲事たるべし況んや人を殺たる者ハ殺て許すもさるべきよし文句を小旗の立たる家うかゞハゞ老若男女と撰ぶ事なくみな殺すべきよし令せられたるゆゑ依て謝都事ハ今ようやく一萬人に及べうとする事に助られぐ令を行ハれ通ふ宰相の官ふ幷まうし其孫の第一ようやうの陰徳故ならん謝都事ハ及第して探花郎として第二甲の科ふ幷まうす謝否ハ及第して探花郎として第二甲の科ふ幷まうす

○又同じ仁福建の林氏の生ふ狂ふ甚悪係き老母あり。ゞくの家仇ふ此方ていふ人圍子を設ふ此方ていふ人圍子を設へたり。或ハ異人かりうふ此老母を窃ふ人乞食等ふ喰ハせたるの人徳の善悪ふ名聞の施行ふ試と思ふて多朝まて変ふ六ツ狂ひづく我も人食へうぶ此の如くする事三年ぐらいのうち氣色うくんうく喰ふたり彼の異人老母ふ語て曰く我を三年のうち助ふ坐ふと含うぶ此ふ因ぐ答ふ大いふ報ずべし汝若ハ死せバ汝ふ墓所ふ高ふ厚ふ其の処ふ葬るべし汝ふ孫の官祿をいふ者廟のまへ幷の数ふ尽くふ栗して其高座其あるべうぶ人出せバ大官ふ幷まうす後代ぐ富貴安栄うぶ今ふ至ても福建の林氏の一門とぐくらべ及ぶ者なしと諺ふ伝へうぐへり

○馮琢菴ぐ父諸生たりけるが冬日早朝ふ起て其邑の学校へゆくとて一人雪の中にすゝみ出て行ける者かう。不ふ俟のうふ見ひられば自ふの衣服を脱て著せ肩輿をやとひて学帰ふ被ひ勲らしめたるふ其夜夢ふ神人ふ来て告て曰く汝一人の命と数百人の命と是軽汝ふ義理ふ中ひ非ざる事ひ誠ふ生ふるかう我其衰老ふ憐て轎夫ふなりて汝ふ代らんとをべしとつぐるぺ法生涯ふ汝ふ生めるふの告ふ依てそなたの名を馮璣と名けるぺ生長して天史の官ふ升るかう其方も勿る忝の馮琢菴ふ史是かう

私ふ云轎夫とくるハ宋朝の賢臣徽猷閣ふの事せ古文真宝の中ふ載たる書錦堂の記ハぺんふの賢徳を述たる也

○台州の應尚書ハ壮年の時ふ山里ふ引籠て学文と也ひ。其處ふ夜ふ入ふ鬼の類集てやもとれべ人を驚ろかれた。應尚書ハ気象者ふてお〻もぢそれざうき或ハ鬼神のたぐひ。ハたして其の家の婦ふ其夫の絶国へ行きてふ久しくなるぺ従ひうふ入ふれバそれをやはらめるぺと思ひ。然ども其術ふ行ふ事ふ能ず。姑の強て他へ嫁入させんとするぺ女ふして合点せざれバ。姑ふ背きがたくそれバ晩ふ迄送て頭をくゝるてそなたの夫ふ逢ふやうぺまをやぐて永ふ用者ふ

まゐ我等化てく入り代りて妻こうべしてこうべ
應尚書化くく寄くく不便の翌朝夜の内
ふ此彼を頼こ自ら持ち来の田を賣りて内金四
をはくこうさて其夫たるの人の偽状と徳り内今ある
を封じこめて逃げ行けねこべし先ず金子と指し付
作なくく書きそこそ家へをーたり彼翁姑封とひら
きそこそこよ甚こ跡の直筆に非こうものと疑ひーる金も
大切の金子と偽らかいら我こうよ用遠ハめりこうと
化して邇ふ嫁入さこと止めよくり果ーて狂なくく
そ夫化まこうねりて本の如く夫婦となれこうくり。
而も金と状とを送りしこうの應尚書ごロこうの妻ごう

こうまこべ内親子こうも
ふこうばこうくり。應尚書又或夜鬼神の語こうを
のごくく悪学生めご一大事と始たこうとこへべ一鬼の云
く。汝行ぞ甚学立ふ所こうと報ざこうや一鬼答て云
くされべこそさこ思へども。天帝こうの学生を陰徳の
尚書と余ぜーれこう。我等行こてまざこてこうをも
んやとこう。應尚書ふこてさこて我此度一人の
婦人を助けこうる陰徳ふ依こくやごて尚書の官ふ昇べ
き案数を與ぬふさこうこへ因果報應の通理こう
ごうごく畏きこうこうこて愈善事を行ひ或ハ親類の内急難のこと

うとかれ〳〵萬方ふる打て救ひ助け。或ハ人〳〵ふく理非
道を言ひうけ者りけらるゝ。是皆我が徳の蔭き故
ふりふりてゐるも怒ふれ受順へり。其仁厚寛裕なる
る時ハ類ふく甚ハ後絶ふ思紳の語ふたがひと尚書と
云ふ言ふ升〳〵ふう甚ふ孫及第もる者今ハ累〳〵ふり
○常熟の徐鳳竹ふ父ハ安南ふ大家ふやう。一年大
いふ飢饉なりふれで。我下仮ふうふうふの仮徳ふひ
なく〳〵ふりふと。おふび許ふくるゝび外〳〵の酋百姓
るゝへも。色〳〵勧諭て皆〳〵許ひてう。甚ふ又我が差
を発く。米穀を出して畫く施約ふり。然る処或
夜思紳の妻と覚へて甚ふて唱へて曰く千不誰
萬不誰徐家秀才。倒做了挙人一郎。とふう此意ハ
徐鳳竹父の名ふふ依ふく。尚ふハ公儀へ石出さる
ふりふう。此ふふ公儀ふも未ふ御存ぜき内ふ天
ふりふれべ倒做ふとひふ斗ふ千
ふ一つもお遠ふとふて。不誰不誰と云ふふ
ふう。此の如く唱ふる事毎夜のやふなりき。果して此
年風竹卿選ふ中れり。是ふ依て其父思徳と積て
怠らざ。或ふ揺なき処へ揺ふとう。或ハ狭路ハ廣く
険路ハ平ふ。或ふ僧ふ施ふ或ハ諸人ふ出會て
んをふして。吾事ふ修ふべき旨ふ教導ふり。甚
後又思紳の妻と覚へて門ふふ唱へふく云く千不

「誰萬不」誰徐家ノ嫂人直做到都堂ト云フ。風
竹某ーて大いニ出世シて。淅西ト浙東トの安巡
撫使トなて官ニなりまう。即都堂のコトヽ。
○嘉興の屠僖公ト云人初め公事方の役人なり
しが。竊ニ子人ニまぎれて獄へ仕き。諸の罪人ト
理非の物語りどもしーて甚實情を窺ニ罪なくして
囚られる者若干人なう。僖公さべきこゝろ公事
とるものゝ名ばかりニて。密ニ書付をいて甚
ーしく然も自分の功ニ誇らず。喜ぶの限りて
頭の刑部尚書へ達せうとて考閲のすゝなんで僖
公の書付の通をいく吟味せられー故罪かる方の

者どもハ各勝ニまぎて。誰陳ざる事能ハざ理非明
らニいわれく。無失の罪を免て許さるゝ者十餘人
ニ及へり。ニ依て洛中ニて尚書ト智惠者ありト。
童子ニてよばが法をせり。是今く僖公ばかりニ
僖公又此ニ懲ニて。尚書獨りト智惠者ト云ハせ
ざらん。ニ依て尚書ふやとて云く。今都
の街隊えの治獄ふまとゝ罪ニくして苦む者多し。
庶き西海の内ニ定めて撲遣者も有らん。又酷役人
も有て。無罪の者ニ苦しむるもの多らんニ。拷者ニ忠
見ニ出くさゝべ式年ニ一度ニて放ちんニしく私ニ
役人ニ探いく。減刑の官ニ任ー四方郡國の役所く

へつらへー。甚彼人のさるべき方の理非を吟味するべ。
廣大の術哀怨こゆるんとつくり。高書もる極むこと同
んしてそ服を天子へ奏聞もて竟ふこと儀ふ定まこ
と別傳公も太座の西きく人なれべ減刑官の人救了
そのらうをたう。傳公或夜の更ユ一人来て告く曰く。
汝ら天命ハ子一人もるー。然るふ今度汝ら減刑の奏
爾深く天心ふ合へう。足ふ因ろく天帝ふう汝ユ二人の
貴きさと。與くゆふそとつくう其後應瓚應坤
應埈とて三子生れく皆高官となれう。
〇池陽の馮太守ハ七人ととう七人目の子馮信
えへ子湖とう云処の袁氏の婿とるり我等も袁氏

うて同姓の故ふや此信之と我等ら父子。もで親き
明友るうき。然るふ此信之ハ博学ゐる才の人ふて考く
選挙ちられたれども。
るをとゐざるうき。平生道家と仏家とを信仰せ人へ。
或ハ浙湖へう云処ふ赴んで不帰一年の内ふ
寺門ふ観音の像ありう。堂も朽く雨露ふさゝるき
ゐて。麻未ふ拯の風情なりられべ信之ハ一畢て勉。
堂建立の志なう別巾箸を拂ふく金十両ら出し。
住持の僧ふ與へ此金を以く観音堂を建立し此考
像を安置してなすらべーとうられべ信の曰此大像
ふ彩ふる壹をふ壹ゐるふ。十両の金ふて功を修へんる。受へ

来るまゝとつひられべ信之又盞の内を拂ふく布巾を
と衣類七色をもて與へなり信之の僕の曰七色の
内廐の袴へ新しき物ゆへ先く袴不自由ともかと
信一の人とつくへ信之が曰く吾輩さへ雨露ゆ濕のへべ
我へ赤裸にても苦しからぬとつひて皆く信ゆ與へられ
へべ打の信淚を流して曰く今を捨て我を施さへ
きのミ難きまでも非ず貴公立へ今の所一言へ受つも
可難き所志にて候つゆへ甚だ志を拔て晋請
ちんとつひきこが紅粉く結構ゆ出來ずる出來の後
又信之我等が父を招同道して芸事に系信一そ。
一宿ちれべ我を寺の伽藍神信之が妻ゆくて謝

して曰く此が信之の功徳ゆ報ひてべ給へとつひ果して信之が
ふるまひをたゝめ出ぬ。
○嘉善の支立が父を。足又公事方の役人にて〳〵が
衆人の内ゆ幸無して軒深ゆ宛ゆ者ありぬゆく
哀まゆ思へべ。信之ぞして助んとめ〳〵ろ〳〵衆
人ゆ。此掾をとんとり〳〵べ。
ゆ思へ信之ぞして妻自宅へ倉ゆ送りまゐられ
べ。衆人妻ゆ向て支の公が左を信之ぞて
淚を流〳〵て妻ゆ語らひ我ぞ方ゆ一生涯乃
別にあらべ。我ぞ宅へ支の公を招きて酒肴

豕んごろふお洞へ其ぐてよ公ま事へぐぐの
公若し甚方ま意みぐぐ我が命ぐ救ふ事も有
ばぐとろろぐ妻も夫の生死の大事なれば泣ぐ
ま本ぐぐそて夫のかの教の如くぐよ公を請待してやや
くぐうてるぐしけるぐ公えぐうたぐ欲食のみぐてなう
みれば中ぐ其妻のんぐ後ぐぐ欲食のみぐてなう
ろぐぐれたかをさぐぐしてこれおぐぐ絶ぐ軈眠をつぐを
まちあたろぐ其者窄よろ生てそまぐ夫婦ともぐ公
ぐ家ぐぐろぐ頭をぐ地ぐはけて同ぐぐ公ぐ真ぐ我が一命う
親ぐろぐぐ大恩行をのれろ報ぐをぐんとて血の涙を
流して一禮を述ぐてぐ早速ぐぐぐぐ中年

も過ぐぐ元ぐ狂ぐぐ子一人もなぐ我ぐ若輩者なから
娘二人ありてろぐ。我ぐ一命を助ぐ公ぐ恩
我が一命を助ぐぐる陽徳あるべ公ぐ子
たろる娘をもぐべ必ず公ぐ陽徳ぐ報ぐぐ
陽感通の理教かぐぐなるぐ作ぐろれぐぐ公も
兼ぐ一子を孔ぐぐろぐ感通の理をぐぐ
ろぐぐ妻の禮をぐ迎ぐぐ後果ぐて
支ぐぐろぐを生ぐ。二十家ぐぐて中第ぐ登り。翰林
孔圓の官ぐぐ高ぐ支高ぐろぐ孫
代ぐ若ぐれぐ。大学博士の官とかれろ
ぐの孫ぐぐ大倫も中第ぐ登ぐ。汝ぐ

あるべからず。
況そや凶年飢饉の如き同しかるべき者のよき事を為し悪事を減じ善を行ふ者の陰徳と積徳との別ちをさとらざるのみか知らず人よ知らせめやうとて故と陰徳を施すも如耳鳴と云ふ。耳の鳴る我れ聞きたがどうもされぬ。他人の知るも知らぬも一向ふもかまはず但善事とさへ思ひ勇み進んで務てゐるべきなり。陰徳も積徳も善根ふんを用ゐるとそこんわけはないぞよ。

れ實義ふ務行ふけら諸の罪と滅して諸の幸福の来るの至ること速やかなるの甚しきものあり。
人ふ善を為すの易しの易しとて我が身を害そうなる様の易しとて我が順風ふ帆かけるが如しとて人の為ふ善を為すの難しとて為ざるふ譬へば重荷ふ負ふて坂路ふ登るが如し。
あらゆる善ふも百善ふ善人顔をせざるふ尽きる事ふ従て善を為す事ふ進んで今更ふ来往く其ふ大畧をふつ十ふ條

なるべく第一よ。與人為善二愛敬存心三成人之美
四勸人為善五救人危急六與建大利七捨財
作レ福八護持正法一九敬重尊長十愛惜物命一
第一與人為善とハ言ハゝそれとなくよへ
もくくの中へお雜くちより誘導するなり。眞
辭とくる聖人れ迹みを居住ものゝ奥を捕て高
貴ふさる者どもをとらんやよ。おもき者ハ老人をお
し延引者ハ弱者をやしのけて奥の多くあるゝ処ふ
てそうそれハ弱者と老人とハ奥と捕ることハ
能なぐるき。眞辭ハ後のるにしてやし自ら者共
ふうちまうして。奥とをとるハ老人或ハ弱者ハ随

分奥の沢山あるゝ処へ教へくらびきて奥をなくれ
らしめ。自身ら奥のかきをおしてかしばうろうろ
又其大勢帰依する者の中にだうろうろも長
ちきるをて者ハ手をかそ尾ふれ付きをひ大声
らど笑ふうへ又其中に眞辭の真似をして他
今も僕いふる者ハ大いふ感じ入たる顔色なく
そ者を誉あげく。外くの者どもと励ましをふた
のいくらに一年やどの後ふそ処の老若男女ほふ相
もぼうて指眞辭の徳ふつうとや此眞辭成時ら。
在迹よりそく耕作ふうへ陶師の製りと居ふ処へよ
居住ふ者よ何もかうくらぼうて若ふべら

ひきのくことなう。衆人の賴舌うて敎のつぐ辭と不
足らかうもうごかれ大ぶ癡と知の者へ從くうつて
行ふる能つざる者故。自術劣をおし迎く敎へ遂てのち
るう足利與人為ぶ者也。凡人と九小せう慮して云うの
ふ志と者ら君為へきこと事かく〳〵ぶこ一人のそろよ
せべ〳〵てく〳〵れうち動めて苦く〳〵れ為とべ〳〵ぶこ年
うとなうとて妨ふこと人を傷べう〳〵ぶ云事と為せべとて
人のあるのかるとぷこ〳〵ぶこ雲能めれべ
とてぷこいけらかしいわ〳〵とべう〳〵ぶこ雲能めれべ
大深く滅〳〵てく〳〵て悔〳〵がまもむべう〳〵ぶこ才智かう
てへ純人へ廣く寛顯せれうにいかく〳〵。其こよ或

へ佛の罰神の咎或ら君。或ら親の權威なくことを
楯よ取て巧よ誘ちく〳〵ぶこ雲能めれべ
〳〵くる云事を為をこんばく〳〵云くこ進むもうよ
人よも吸聽〳〵てえとやとやうにとべ〳〵ぶこ敎一言
をそうで日くの日こ言を步〳〵一事を約ふる我身
のことを指をて及ひめますでも廣く世界のくくの
師匠となりて二世の惡知を成就せ〳〵めんと約ふる
べ〳〵是をえ天下のえ人となうう。
約二よ愛敬存心とうにのつなうう敬とうに禮
のるうりあねんとうにのつなうう敬とうに禮
元一切事よ務ふよとうに分て或ら君ふえ親ふえ節をうに

或ハ妙寶小福ニ驕ル私ヲ
ノミヲ君子ハ勿論云ニ及ズ小人ニモ亦或ハ名譽
ノ為ニ或ハ女色計ヲ好ノ為。或ハ勢力ノ者ヲ畏ル故
ニ君子ト小人トノ異ル所ハ恭ク敬ヲ以テ
ニ在ト云ヒ。君子ハ内徳ノ為ニ外ニ其
ル者ヲ同テ。孟子曰君子所以異於人者以其
存心也トイヘリ此君子ト小人トノ分ル心ノ在所
ヲ在トイヘリ。君子ハ一切ノ人ヲ愛シ禮ヲ
ツヽシムヲ在所トス。仁ハ一切ノ人ヲ愛スルヲ
禮ハ一切ノ人ヲ大切ニスルヲ以テ
地ノ法ナリ。天地ヲ一切ノ人ヲ大切ニ愛ス。

親疎貴賤ノ差ヒナク美ヨシ悪キ偏頗ノ思ヒモ
ナキヲ者也。ソレ古ノ聖人トイヘドモ賢人トイヘドモ
ト禮トヲ存ジテ天神地祇ト合體スル者故
天下ノ人ヲ愛敬スルヲ以テ聖人賢人ノ地位
ニ在ルヽ。ソレ即聖人賢人ノ御手傳ヲヲルヽ人也。
ク論ゼラレテ萬物皆我ト同躰ナリト。而シテ仏ノ方便
ノ説モ亦人ノ明徳ヲ明ラカニスルヲ以テ
繁ル事ナレバ。吾輩ノ足ヲ及ブ所ニ非ズ。天下ノ人ヲ
皆ヒトシク天地ノ如ク仏ノ如ク愛敬シテ

を施すべきことのみ。
第二成人之美と云ふ人の若志有
又為に立つことなり。更に孫
人の内純乎若志有
助け導くことを辛くして資みちひくべし若
る者をとらんべんことを云ふ
ふうたる若事を為ことを
進めんとて又或ら他ようの
おもんばそんようのうの
又辛生悪したるものるべ
を申すべく而方よ方便して過を改むるの感悟

さることべし。大凡人々のこの
かるべくも。懦厭者也而
い多し。多勢ふ辛勢なれば
若人よそれみ妨らるゝ故ふ
人ぶ十人百人百人多くい
悪る者ゆえ偶百人も時
う者のくを細謹よ
ついたて、成べき若事も
長者と云者なり。希
ほもくよう長者とい
悪悪んほくよう

又は我に敵する者ありても、ひさしくは限ることなく、終には
て救へ遣す者あるやうのことを万人の譽ることも、
屠と名ざる故に我うちの家内のみならず、
一郷にみ在て八一郷の人の悪をひるがへして一圓ふ在て
八一圓の人のために生ぜしめ福善をなせしむるなり。
算四勸人爲善とは一切の人の底を擧ていふ
きに若しの字は者の字の誤りなるべし。
悪くとも。母の中へ落入る赤子を助けざるものは
なきがごとく、然し今日それぐの家業ふ
奪てだまく若事をなすを耳に入ることも
もくふそをもでんとそみても身ふ行つて一生

を吟ずるひとふ事なくせをるやうのことも
また妻子ありとかんこくぼうこ化せ然を法る者も。一旦
若しの方ふ機をみうけ甘ざんの所為ち安ざるに我
り然不足のくも止ざ又指画くの貪者もさのこと
若しなくば猪狗ふもひとしくそうく所ふ取
りまし。思しの外ふ繁昌ざる者也。然も大愚癡
なる者ハ此の平道を實のみちとしらで迂遠
るやふ思ひく一生あくせくと業ふ身ざくばしる。又人の生
つざる貧賤ざる者ハ貧賤ふ馴染
るが故ふ甚きを悪ざる者ふ似ざる者ハ宅ふ
せ一者の中頃ふ元ふよりたる者貧事賤ち

よろづの人を侮りそしり我ふそうちねたみをもさしおりなくの謀計を企くぺくをえたくさんとしぺ公事公儀をうけ人と雑言をうけ。
後ーへ天道を怨ぺ仏神を誹謗し頑愚胴慾乃好きくまでを思ひしのくを妬嫉さるのぐふ狂走者多ーうちうて惑たるくくをるのふまで溺ふまでて若道へ勧人をてぺのよ弱たるくを助わけたくるう如く恐きこなくくを浮覚てるう如くふ發得されだきてるう。韓退之曰一時勧人以口百勧人以書とくるう。百年よ年の後までもなくの利益ありぺ

をれくくを勧るふ両三のるくくぺされたるくへぺ当病のくくの書物をるくをてぺ祈ぐ煩へぬるくーんをさるくべき由くへ書物をるくをてぺ祈ぐ煩へぬるくーんをるう然をれ己よ病をせんくーるる八過人をとうて菜をと與へくぺ療治をんべありるくべるくーぺくへぺ其ふ物好ふ後てぺ其ふ物好ふ後てぺ若よ病をるて悪をと教るまくぺ当病よ逃ーるもむべーぺの教ふ書をと然りとて日おの病若をと救ふるをと捨てるふ

非ざるなり。ぞて又我ら人の切なるまことくいさめて先ざる事のぞよさそうてぞうとするくらゐ有ぞ我身よりもぞ一足も我ぞ才覚と徳を我のぞらの致そうと知て誤り入ぞうからおのれにくもを後そそうんかりくべ。教へらるゝ人のうへ。考たるこそぞべし。第一救人危急そうへの難そを救るゆゑ。或そ不義そうた不測の難そ救てぞをせめたるやうの難くぬぬぜうせうぞ一時ぞ後て義。或そ不義そうた不測の難そ救てぞをせめたるやうの難そ救ふ。或そ非ぞ不義道そとりちらけしぬ奮量小さべきこうして救るぞうんそ時の難そ或そ一時の

簡ちぐいして御法度なとそ犯しそる時の難そ第一ぞの類常くなりそるぞうへ。神ぞ崇そ痛通迫そる者そぞぞ十人寄ぬ着それぞくく若りぬて彼此大ぐいぞ謀定ぬ我ぞ身のとぞるたゐそのぞのかんとうぞ。えそ人のんの若そを宛うそしべ。甚とそて後く工まそを運し。ぞ入まこて救助べし。崔子曰恵不在大赴人之急可也。此意ハ。ぞへぞ労情そを施さんと志そ者ハ忽しもぞの大ぶりぬ限らぞ。ぞへの急難ありそをそて助ふりぬ救ふんなそべ。彼ぞ貴ぶ

一者の言ところべし。まず二冠の人の中にその若
人ある非ざるにて、或ら生れ付きたる口舌やきにて人
の急難を救ひ或ら人ふんどころ孤立指つめ擯てて雖
ども或ら救ひ或ら受けその業うでくをして好うくぬ人がら
の者大夫の志氣ばくうをとかくまし、或ら刑罰ものべき者をふるま
を治めて安んせてなの外よ大いうる若根を
為しぃ而も其身ら云のこのたゞ知ぬ者ありぃか
やうの人後ら或ぞ不ぞこの金りへけをし、或ら富る
人ふねそられ或ら發明る好子を生ぃ多ぃ金長久
てそをふかくぅ安ぇ来ふ治くうと遂る者多しぃのて

若者ぅもあくで仕合の好人ら。古来ぅうくの怪疑
るなれぃかくれぅる若根のなくし故とぇぅふくの
付ぅぴぅ故ぇべし。但人ハ身の若ぅうくの若ハ救
救ふぅぺくの知ぬれ大若ぇぅ云ぅをくも人の若ハ救
屋ぅるぅ徒更言餘のぅぅ者ぅぴと若しぬもめて。
人花ぅなるをもぅぅぅんとぅふくぅハ心倍くの恵救を
更ぅぇぅべし。
第二い與二建大利一とハ大きくしくべ國或ら郡ぶさくぇ云
ハ村里ふ於くぅ其人の力相應ふ人くの傷ひふ
ぬものぅぇぅぇぅぅぅ或ら吐血ぅきこれぅハ集と擯。
或ら堀と築て法ぬの住ぇぅぅ或ら路橋と修理

まて往来の人の仮りに一夜一宿を興へ又は宿を借或は異国の時々我国へ来る時に逢き或は彼の国の人どもとも物語をするも皆是非遂果べき事ぞかし又人の力及ぬ事をば勧めしかへすべき事ぞかし又我身の若労を顧ず但人のそこらこゝろ天道の御心に叶ふ人ぞと思ひて等閑に思ふべからず。

七捨財作福とは佛法の為の中にも布施の一字を以て諸善万行に通ずる也。因て條目ごとに施財と云ひて此外にも施命と云ひて仏門にて法を説聞せ或は経巻を写し人に与へ或は仏像を造り堂塔を建立し或は橋を渡し道を作り井を掘り船を設け渡し人を助け或は病人を看病し或は貧窮の人に薬を与へ或は困窮の人に食を与へ或は衣服を与へ或は家なき人に家を与へ或は人の為に善知識となり或は人の為に善き師となり或は人の為に善き友となり或は人の為に善き伴となり或は人の為に善き導となり或は人の為に善き従となり或は人の為に善き主となり或は人の為に善き親となり或は人の為に善き子となり或は人の為に善き兄となり或は人の為に善き弟となり或は人の為に善き夫となり或は人の為に善き妻となり或は人の為に善き叔父となり或は人の為に善き叔母となり或は人の為に善き甥となり或は人の為に善き姪となり或は人の為に善き従兄弟となり或は人の為に善き従姉妹となり或は人の為に善き舅となり或は人の為に善き姑となり或は人の為に善き聟となり或は人の為に善き嫁となり或は人の為に善き主人となり或は人の為に善き家来となり或は人の為に善き師匠となり或は人の為に善き弟子となり或は人の為に善き隣となり或は人の為に善き客となり或は人の為に善き亭主となり或は人の為に善き案内者となり或は人の為に善き道連となり或は人の為に善き相手となり或は人の為に善き仲人となり或は人の為に善き証人となり或は人の為に善き目利となり或は人の為に善き医者となり或は人の為に善き鍼師となり或は人の為に善き灸師となり或は人の為に善き按摩となり或は人の為に善き占者となり或は人の為に善き易者となり或は人の為に善き相人となり或は人の為に善き歌人となり或は人の為に善き連歌師となり或は人の為に善き俳諧師となり或は人の為に善き手跡師となり或は人の為に善き絵師となり或は人の為に善き彫物師となり或は人の為に善き細工人となり或は人の為に善き鍛冶となり或は人の為に善き大工となり或は人の為に善き左官となり或は人の為に善き屋根葺となり或は人の為に善き畳刺となり或は人の為に善き桶屋となり或は人の為に善き鋳物師となり或は人の為に善き鋳掛屋となり或は人の為に善き研屋となり或は人の為に善き鞘師となり或は人の為に善き鍔師となり或は人の為に善き鞍置となり或は人の為に善き轡師となり或は人の為に善き鐙師となり或は人の為に善き鎧師となり或は人の為に善き兜師となり或は人の為に善き弓師となり或は人の為に善き矢師となり或は人の為に善き鉄砲師となり或は人の為に善き玉師となり或は人の為に善き火薬師となり或は人の為に善き鋸師となり或は人の為に善き鑿師となり或は人の為に善き鉋師となり或は人の為に善き鑢師となり或は人の為に善き鎌師となり或は人の為に善き鉈師となり或は人の為に善き鋏師となり或は人の為に善き小刀師となり或は人の為に善き針師となり或は人の為に善き鍬師となり或は人の為に善き鋤師となり或は人の為に善き鍬鋤師

のおほなり。今論ずる所の陰善の中の施功のうちなり。甚多くの人同じて衣食ともに給ふを積善者多し。衣食ハ財なれバ財分人に累ふおよびて大切なる者なり。其大切と思ふ物を捨て施すハ我身の慳貪の非を免るゝ他の方にて ハ貴若くハ殺捨たる言の葉の意ハ聞へおもく勢ひ多く紀ゆくなれバ能く捨たる言葉なり。故ふ初ハ多少ともに捨ると思ふ物の味を知ると紀ハ後ハ自然と進む者なり。扨私曰ク根ハ塵を捨るとハ仏法の中の小乗のごとく六根ハ六塵を捨るとハ仏法の大乗の法門なり。實ハ六乗の法門を捨るゆゑに。

又ハ多くの功徳の梵文を書写して亦ハ読誦して他に与へ教へ施すなり。但向の意ふ合ふく。一紙ま多くの字の意ハ閑へ物を捨べきなり。問ふく曰く捨る言葉陰の薬をとるんして施すべしと有る時ハ全く是陰徳なり。然ま ハ陽ふ物を施すハ名聞ふ成りぐるゝや。答ふく ハ非ず。字ふ二ツの意ありて施すなり。施すなる物を惜むこゝろをきくと捨て人ふ物を施すなり。是を閑へ投入れくるゝ如くなり。禮を拳られんと思ふ ハ又閑ざるゝ也と同じ

ゑう。此其旨(むね)趣(おもむき)なる物を再び用ふるゑう意
なり故ゑう。此云ふ所(ところ)ハ切徳(せつとく)を以(もつ)てゝよハ
ゆゑ〳〵ゐ。ゐとも。恵(めぐみ)の施(ほどこし)の広(ひろ)く陰(かげ)の深(ふか)きを云ふ
国ゝく陰の深をゝゝて施をを捨(すて)と
云ゑう。扨甚(はなはだ)よ随喜(ずいき)のんを起(おこ)さく施ハ。
ゐ聖(ひじり)云ふ今ふ者ゑう。決(けつ)て陰徳の捨と云
ハ陰徳刈(かり)ち捨ゑう。無ふ陰徳の捨ハ大の
如くんふ〳〵むまゝと思(おも)ふとも元(もと)んのわ
さまゝさふハ思(おも)ひ〴〵ぐてけ生ハんふ養(やしな)さ也
まゝ〳〵之れを言ハ也(なり)ゝとゝて陰〳〵ゝとゝれ
るゆゑ陰〳〵ゝとゝるゆの大徳とゑるゆけハ古

語ふ。天聞如雷(てんのきくことかみのごとし)天見如電(てんのみることいなづまのごとし)ゝて称(しょう)の方(かた)ゝく
深くゑうゆふ故ゑう。中庸ふ莫見乎隠(あらはれたるハなきハ)ゝく云
ふも国〳〵んん陽徒と陰徒との不同ハ有れ
ども。捨の字のんを用る話ゝ〳〵ハ同〳〵ゑう。
貪女の一灯ハ陰〳〵ゝて仏書(ぶっしょ)ゑゝれ非(あら)ず
第八護持正法(ごじしょうぼう)と云ハ儒仏の教を束(つか)ねて正法と
云ひたる者也。此正法ち徳を積(つ)ゝ天下を治(おさ)
め。吾を勧(すゝ)め悪(あく)を懲(こら)し二世の悪報(あくほう)を感(かん)ぜ
るゝゝれハんくゝて。ゑゝく八眼目(がんもく)の如くなる者
なれハ。むる敬(うやま)を尽(つく)さゝ〳〵甚ふ非(あら)ず仏
国ゑう細(こま)くの木像経典の類ふゑゝまでも

若破壞よ及ぐ宜く修理を加へ成光倍增を釈るべし。経文一ツの警あり。蘗をおんと思ふく猟を釈めべし。蘗をはるぞとて米をはるぞとうし。仏教ハ後世の法なれば現世の蘗をはるの事也。是を以世間の事をはるぞと云辟のみ也。是を以世間の事をはるぞと云辟のみ也。是を以世間の事をはるぞと云辟のみ

窮居みそなはすのこゝろ。又母の喜ぬよが嬉
く樂しふる者ぞ。考く此孝ふ務を八ろ
成し性ぞて自然と柔和若くの人物と成也
柔和若くの人ハ一切の若神右太ふ左傷く
守護をるもの者ぞ又君ふ事る乃ちま
さなをども今日の當務八うげひなるし
を第一とをべきぞ。古人の言ふ事君如天
とぞう。君の見つぱ天
通八見徹なり。上八君よを敬下八百姓を恤。
爲政刑賞ふ私なきハ君よりよ天の盛徳なり。
古ぞうむ者のあの繁昌をるの當時の

用ふをえても知るべし。
第十愛惜物命と八殺生を戒るの。殺生を
ふるう。凡人を始ぞて畜類虫けらみるに
ハ別人のんなり。畏ハ神のんなりぬく天乃
戒ぞ別意ハ別意ぞう。畏ハ仁なり此仁と云者
まて。此天のんなる仁を命と名にる者ハる
物の實の内の柔ぞる肉を梅仁と名付るも梅
の木の生くをる根幹の余となる者故仁と名
付なる者なり。桃仁杏仁ぞも皆永ぞ又人の
身の内ふるをべ生氣のをれ処の病
の名を不仁とぞも。其なるなくれ八命ぞ

とて是れ仁なるなり。此れ是れ仁乃ち
物の命なるを知るべきのみ。是をもつて
孟子も惻隠の心なきを人非にそともいえ
う。惻隠といえば仁なるがごとし。仁は
ぐなるものなるべし。故よおの命を教をいれ仁を殺
そるの。仁を殺をいえば天のかんを教をなすの。是此
のごとく豈戒ざるべからんや。因て天命鬼神乃ちん
を方ふ者ふかい非そ。くく人の去右ち後ふ
澤くくる者なるべし。是をいて顔子仁を問へを
孔子答て曰。非レ禮勿レ視非レ禮勿レ聽非レ禮勿レ言非
禮勿レ動と。是仁ハ天地鬼神乃ちんて是ふ接

待ちるハ聖域のごとくなる故。顔子ふ答へなふ
のごとき此の如くなる者ふり中庸ふ戒慎其所
不レ睹恐懼其所不レ聞と云へるも。孟子ふ仁ハ天
の尊爵也人の安宅ふして正学のふ路ふ由るべし。古の人の徳を積と
いえるハ此の仁をいえ之於禽獣也見其生不レ忍見其死聞其聲不忍
食其肉是以君子遠庖厨也といえり。此意ふ洋
洋雞犬の類をいえて禽獣とえなり。君古ふく。
ハ是をいえ仁をいえるなり。然る小君子
たる人ふ此仁をいえ日のおふて殺て料理ふ

又ら月うふんでとる。殺さゝれて苦む聲を耳て八其肉喰ふ下らんと思ふ君子なる人の庖厨へ入を方ふ遠ざとうつるのを務めたる人ぞ古へふ四不合の戒ありっ八殺とうるのを算てハ合ハざと二ふら殺を見んくハ合ハざと。三ふら家ふ畜たる魚多の類を合ハざと四つふ我ふ鄉會故ふ口ざく殺したる八合ハざとなう此等の古賢ふ習ふて教生を戒ハ一ぺくく俄ふ肉を断ふ八成うるゝれバ先づ四足二足をたち次ふ鱗鰕蛤卵等の生を断ふ殺して食ふものをうち後ふハ無情物をたつやうにとしバ善遊んをくむ

ふ法ふく一向ふたちそも若ふみうくする者也たゞ又是のごなるべ螻蟻蚊蚋蚤虱ふふる生ぞ皆天人中の靈物也。妄ふ殺害をとゞうべ苦惱の水ふ溺を救ふく高第ふ升。奮ふ廉のみを助くて大名ふ於りくハくる。苦行ハ限りるゝ驚く此十條ふ依ふく大悪を遠るなう。修を法ふ准じて廣く善ものを行ふへき者うり。

訳去按ずるニ。問てえく仏教の中ニハ殺生を大悪とく。諸の戒の言和ふ居ゝり。若無くバ周孔等の聖人を行ぞ此を戒めざるや。答て曰

周礼ハ佛ヲ以ル戒ノ如ハザルベシ。殺生
戒ヲ傷者ノ戒ヨリ以ル故ニ殺ハ必ズ傷ザル故ニ
ク若人傷者ヲ云ベク殺生シテモ善ト云
ルベシヤ。答ク云ク衆生ノ業各ヲ存ヨリ
如ク人ヲ傷ク罪ヲ作ル如ク人ヲ傷ク罪ヲ作
ヲ以テ人ヲ傷ク罪ヲ作ル如ク人ヲ傷ク罪ヲ作
生ヲ許ヲ以テ人ヲ傷ク罪ヲ作ル如ク人ヲ傷ク罪ヲ作
ルトイヘドモ古典ノ中ニ来ルヲ以テ人ヲ傷ク罪ヲ作
ル。論孟礼記等ノ中ニ天子無故不殺牛請
候無故不殺羊太夫無故不殺犬豕トイヘリ或ハ
狗ヲ以テ捕ル網ヲ以テ捕ベシトイヘリ或ハ渕川ノ魚ヲ

捕ルニモ擭ヲ以テセヨトイヘリ或ハ弓ヲ以テ射ヨトモ寝ヲ射ベシトイヘリ或ハ子
姓ヲ以テ守ラシムベシトイヘリ或ハ捕ル
ル肉ヲバ報ヲ以テ若ヲ以テ
ヒソヒソ云ヘルヲ以テ人ヲ全ク殺ヲ殺生ヲ善ト
ヲヒソヒソ云ヘル者トヲ以テ人ヲ殺生ヲ善ト
ヲ以テ人ヲバ麒麟鳳凰生ヲ以テ非ザルベキヲ以テ人ヲ
仁徳仁ヲ以テ故ニ生ヲ以テ人ヲ
テ歩ヲ以テ人ヲ以テ人ヲ
但行ノ貴ヲ以テ人ヲ
ノヲ以テ人ヲ

此生仁獣も殺生せざる仁鳥も殺生せぢるを
以てれバ仁人も亦殺生を好このべさる方理ら
と答ぢるべき云く聖人実ハ殺生を好
こゑへざれハ仁ぞ一向ハ殺ハ悪ぢるや若て曰く知
らざれ仁一物を殺ハ天人を殺ハ天人を殺ハ別
我を殺也故ハ聖道を修行ぢる者ハ生を好人
きるゆゑうされど天下の人くハ聖道を学ぶよ
人ハなてハし然る時ハ遍られ悪勢
る方ハ止るゆゑを以おしてハ法律を建也ゆゑ
者とゑへ人なる者ハ菩薩の霊王國を失つ
て卑士ぶ家ハ入ハく種りて死を卑夷奉霊王

ハ大悪ゐる故ハ己ぐ二人の女子を殺して霊王
の殉をさせて葬るゆゑ方傳ハ出つ是弥薬ハ不仁
のるゆえと云へ共ハ殺ぢるの故をつくろ
ふ。此等皆方のろ理をいくそうぐ故をりつて
殺生の罪を奪なるべし。親の敵とて人を殺ぢる。
孝をいく殺生の罪を奪べきや。ゆ王の天地
宗廟をまもるハ牛羊を用るも誠を重ぢ故。
卑夷の賓客の舎宴或ハ羽毛皮角をとりて一切
の器械ハ造るぢるべき者をや右のハ
使役ぢると同ぢ理ハして在上の人の天

下ま[illegible]を治るの法制ありて周礼等よく考ふ記もふ雷ありて廃人の妄よ靈小虫への類を用ふるも鮮腥牛肉の九菜殺蕃人の獺の薬湯をもちふるものふ八非そと云ひ羣と奪篇もありて羣のさまとうべきが如く肉さへ飽とうべきたぐひ八肉そ大八在家の出家の中にも魚食四の大八短命と市中共家人ども命多きれどこそ知るべきなり。史書の五極と云八仏法にて悪逆之傷通そへたと今言根を行ふ人とする者の物の命をと害して若しやぐるやと云ふ等よ及べべくや。若後生報應の法八用ひざとつて用ひて可く若今日ふ当て物そ報ひて天道なりと云ふ等の者ども[illegible]隠のふなく人と云つべ悪しいかそ[illegible]改過私曰上来い都べく事の[illegible]約を之つ[illegible]編ふよやなるあるよ当を進て仏祖のよふ放て教暢者也

[illegible]人たる者八若そ[illegible]せび悪軟嗜ふと云ふ[illegible]左傳晃ふ國語の中[illegible]て甚人の吉凶禍福を云ひあてたるの甚多[illegible]人の吉凶八そつく中[illegible]顕ふ〳〵者ども。考人八此等を知つぱる故ふ或ふ

劒豁ふ過或ハ死ふてもとるまても何の辨もなく偶然として行るのミ也。
春秋の時ハ古代のまゝにて聖人の御在世ふとき時ふれハ賢明の人多くまそ人の言動をこゝて能知りたるなり。然るふ人くハおく悉ハ是非ふべきれど知らざる事ハ是非ふべき様なく顕れ我ふハ是非ふべき様なく顕れ我ふハ是非ふべき様なく顕れ我ふ

を知らざる禽獣生ずるといえども孟子の一語に過ぎず改むるに吝なるの人の言和の拙きより。拙とは方のくろくのみなるをいふ方へ歩むなの如くろくをつづるをいふ方へ歩むなの如くろくをつづるをいふ方へ歩むなの如くろくをつづ

つ此意八一生悪を遂りしへの終臨て悔及て
一生のおもを矯直して死ところ。
志専一つらしば悪を改めて若とうとうへ臨べ
千もの圖室ふ一度大をとぶせへ忽千年の圖
を滅ところ如くくめ十六十ふも及べだ
たとい吾行の報を冥くも。老てのち同なう
うっどこてんの報うぬる者うち。哀むべきこうち
過をと改ることい老ふ。其身も長くみうう
見いを禍をとう孫ふ仏門の教ふ
くくとこうの倫理の報
て云へ老少ふ不定うち若一旦不
ふ綴うへ一生へはもむくべきのをし仁者うち。岩
等三要發勇心とふ過を改むふ斉る
を起ぶてうと云也。くの過を改むふ斉る
ろ恍弱紳ふんを奪ぐ故うち。若行の者
の室中に衣を脱で為川小兎へが如くに毒蛇
ふ指を嚙ろ者の其指をもて捨ろが如
くの念と起さくし。天合の釋ろも捨身決定せ
ば行の罪ろ不滅とこうち。従来悪うを為せ
我身へ吹日死ろが如く過を改なる此身を今日
生れてろが如くと観念して。真實心ろ大雲

を仮とし。此を以陽の風雷益の教ふる所の右兵三件の教を務めよりも爲の過なくして其妻の氷の日に遇ぐが如くなるべし。改ふる事有て事のよふに改ること。これを改ること。二重のよふ也。第一ふ事のよふに改ること。茶日教生せざる者の今日改めて教生せざれば。茶日膜悉きものの今日改めて怒さるる如きぞ是を事のよふに改めて改ることなり。

第二ふ理をこれ改ることなり。天地ハ好生悉殺なり

然るふ天地のきこひなる教生をもて。天地ふ敵對をぐき理あるんや。又一切の生類至微のふ蚤と雖も。命を惜む気も気も同じくかくるの理。蚤を殺して気ろ口腹も一飽ふ止る。奥肉の腊も一飽ふ止る。蔬菜の腊も一飽ふ止る。何ぞ彼生命を害して我ぐ生来おぐの腊を摂るの理あらんや。又人と他の生類と飛ハ異なるとも人法ハ皆一体なり。然るを同士代して生生安くの他を結ハ禍ふ感ハ非をや。さて又怒を戒るの理を云ハ。先怒ふ因て怒る。福ふ因て怒る。是非の論ふ及ぎ甚ぎ多

我ハ狂ヨシテ彼ハ狂ヲ故ヨ紀ヲヲ。而ヲヨ毎
狂ヲヲ人ヲヲヲ乃者ハ笑ヲ人ヲヲヲテ利ヲヲヨ
ヲヲヲ者ヲレヲ及ヲヲ不便ヲヨヲ見ヲヲ也
ヲヲヲヲ児童ヲ爾力ヲヲテヲヲヨ員ヲヲ共
後ノヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヨ古語ヨ曰ク。天下
無自是之豪傑ヲ無尤人之學問トヲヲヲヲ。
此ヲヲ凡ヲ人ハ人ヲヲヲ偏屋ヲヲ者故ヲヲヲ
吾ヲ子等ハ非ヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲヲ

怒るんでもきくんでもそこへ学問もそこそこへ学問もそこそこへ学問もそこ

うつゝ夢ともわく日天来よ出ゝ時て端乃悪罪
邪神そこぐく伏隠ろ如くなろ。曰く悪くいゝ
發ともぞ。發てもまろよ。但一くよ吾事
吾るゝ志一心会相續し同致るけまぐ邪
会を改ることを行ぶとして自然よ止むへきなろ。但一
足を言ふ根のくの約ひいろ不の真傳くを一
此真伝よ堪ざるくを事のくを放く改むべ一
そて若一此志体修約のくを自力のくていい
罪を滅一難一と知りてをくい能き味よひ
能き交よ交つ。遠くいゝ仏天を拝ゝ孰を記一一心
丹精を種福一て至極よ急ぐ識悔改を

へ一或ろ一七日二七日或ろ一月二月よろゝろ
八必ず此當身よ於く霊験をひるるあろ。甚霊
験の一二をろく。或ろ心神恬暗しそくりち何
の滞る事なくひろくなろ又世間よ貪ぶる
不善なれぐん中おしも動勉そろるよき
なろひ或ろ智恵ねよ宜くして若ろ世間の通
理。若ハ此世の通理。若ハ書物籍乃義理なぐ従
家宝よ居ろ者の忽四方のろ清ろ宜き
ろ如く。ひろれろろと。或ろ處冗皆而觸
念皆通とへたろ人ハ世事繁多の湯不よ宿て思
業ふひろごして判ろよ。悉甚理よ会ゝ

あるいを遇宛雙言而 頭作喜 そゝや我ふえゝれ
招宵て依よる者宵ふ見ひよゝべさる者よ
ゝ見いなゝをして和 融をゝこゝろ 或ゝ
吐出して義をゝ 或ゝ神人異人の教を受る者
をゝ 或ゝ虛空を飛行ゝる者 或ゝ
佛堂神殿の莊嚴の道具を著ゝる等のゆ
なり。是皆罪障深重の故ぞ。改悔して清潔せ 故ぞ
此の如く改をゝるゝ。扨是等ハ淺く
の故の窮ゝきゝるゆなれば時自
滿自得の意を記ゝて。弥念を加ゝて益進しべ。昔唐士の衛と云國小遠伯玉ゝゝる

賢くあり。孔子もゝ
ゝ二十歳の時十
然ふ九一家ふゆ
思ゝふ非なゝゝ
ゝて又年乃非を
の非を改む。此の如く
ふゆく非四十九ゝ
遠伯玉の如き賢人なれ此十の年にゝて
改め過されぬ者ゝ
元流の者ハ過悪日
ゝれぞ是も非もゝ

のこれ非そ。さる悪ろ
口ろも言てうくとお暮とハ
べ。されバ太の如くそ
方ろも
深重ろる者ハ或ハ心神昏塞轉頭即忘ろ
次ふ花老ろる
夕べふハ七。右ふ
中くになる者ろ。或ら無事而常煩悩ろハ
ろもきは仏
悪こ。或ハ悪げろ
そ強て

して心神を悩乱ろる或ら見君子而鄙
然消阻ろハ道の正しく
そぶうしく。平生の
ろを欲ろる。或ら聞正論而不楽ろハ
腐太れ乃者を
算ふハ耳にさるる
苦しむろる。或ら施恵人而反怨しハ
人ふ慈恵のろなど施せハ及て恩そ忘ろく
報ぜる中ろれせろるくろる。或ハ夜夢顛倒甚
妄言失志ろハ
そ変ろくる及て

そこんさくも我が身後の方み忌ひそうぺん人木
も妄うに語う耳せ志もその狂〳〵くなるも也
是皆積悪の験なる者なうぺろく大ぬうのつみ
人ん思い知うなるんこんぺぺ憤發して過ちを
改むべし猶豫そうれ

訟云ひ第三條ちと根の人の倫そそるみて
幸侍れふ於く別ふ臓悔乃倹法有う。在来下根
のくの一條を行〳〵いるるまふ非ぞ。で先生一家村書
そ蒿〳〵て天下の人ふ名を働んとそろに上中
下二根の人を洗をべきふ非ぞ。悪き臓法ふ別
濯よ西づうて大概そ知るなっ史知んみ人

ひ一條の及び雑きそうそく全篇の主意そ於う
るまそ旦今又員きそ加へて初人の為此
一条ふ准んで一つの男行をえらぺんの如く
乃當下をろくろくえて彼のよふ出と秘文をと
噛ふぺ〳〵是元上のふ非ぞ。ふ要べきふあ〳〵そ
きて又ひ改過の篇の初めふ人の威儀言動を
えて古函そ知るる。左傳國語をんぺしこうう。
左傳國語をえてるくふ自會得とべきこる勿
論世来ぞんぼるふ甚んわれたる〳〵ぼこべし。今

二書の内そおく畧して〇減孫達諫桓公周の内史軍て。減孫達が魯国ふ在て子孫長久なるべきことを知ることを〇瑕擧足高尉伯比見て屈瑕が敗軍して終ることを〇宋乃公子御說云人魯国より使ふ對ふの語を減孫達耳て御說が宋の君となるべきことを知ることを〇周の王子頽宴樂失時鄭伯耳て王子頽う佐ることを知ることを〇鄭厲公六代の樂と備原伯耳て甚年の文月厲公卒ることを知ることを〇郤子と魯公と孰賢傲叔仲惠伯見て宣が四年越椒が三族盡く滅されることを〇〇宋公と叔孫と宴して相哭を樂祁ことを〇〇晉の子越椒が僖十年の冬二人共ふ死せることを知ることを〇〇鄭伯捘王過両楹間士貞伯云く。

〇鄭伯のえしてゞ死せることを〇〇咸粛公受服不敬なう劉子こんて咸粛公う瑕と云ふことを〇〇周の景王無射を鑄る冷州鳩景王のん疾ことを崩ぜんことを〇〇齊の高厚太子光を相く諸

候よ會ゝて不敢なろ。士莊子ろく後二人ゝてろれ
敎されしつゐそう孫くろ。〇魯の叔輒日食ゐ
哭ゝて昭子一尊て甚年八月叔輒ろ死せしゐそう孫
て知ろる。〇鄭屢宋ゝ使して競子孟獻子一尊く勉
政の三ち夫盜ゐ敎されしゐそう孫くろ。〇衛
の石共子死ゝて甚子悼子哀まゞ死成子一尊く悼
子ゐ出奔せしゐそう孫くろ。〇齊侯ゝ衛侯
と會ゝて二侯俱ゐ不敬のゐゐ叔向見て齊侯
八喪ゐ壯ゐ年衛侯ゐ年同く我ゝらまゝしゐ
そう孫ゐて知ろる。〇晉の程鄭公孫揮ゐ會して降
階を問敖明一尊て翌年程鄭ゐ死せゐそう孫ゐて知

ろ。〇晉の韓宣子聘周辞ゝ失ゞて大子一尊て宣
子ゐ子孫の栄へんろゐそう孫くろ。〇鄭乃
子展伯有ゐ子西ゐ子産ゐ大叔仰段公孫段以ゝ七人
詩経の中の詩ゝ思ひくゐ喝ゝ。晉の趙孟一尊て一
一ゐ其人くの体咎ゝ知く。論定せしろ。已ゝ二十件
ゐ有ほゐなろ。盡く生ゐそう孫ゐハ煩ハしくろれバ畧ゝ

決科要語

揚貞復先生撰

休寧ゝ云処ゐ洪甲先生ゝ云人ゐろ。其門人ゐ程学
聖ゝ云人ゐろ。聰明ゐ乃ゝ人ゐろ。中年以後ゝ身ハ人間ゐ有ろ心ゐ
なろ人ゐろ。神を冥中ゝ往来せしめろ人ゐろ。遂ゐ冥中ゝ雷

部朱友として雷方の役人となれるもう一人の故人なり。生死を云ふ微塵もなく、夜の如く雷雨のごとき雷の為めに驚き恐れ方ふ師匠洪甲先生へ告げ知らせたるも始末ハ他人へ語て知らす者なり。但洪甲のミ知るもう或ハ洪甲我身の一生涯のうちを問ひそれで学ミ同く先生今世八務多忙ニて真中に於て甚ざ先生を重んぜら也因て先生を訪ふ圖君の師とせんうを称へうと云へう。洪甲聞て一笑して同くともも今世の身分八変幻なり。今ハ冥中に徃く圖君の師となるハ未快活のうれ涙をやとゝへう。然る処其の日の暮方ふなんて洪甲俄ふまて倒まて正氣を失へうそのあ之ふ永眠の人庭上をきくあり。しに友人のもう云ふ者あ六人ふをきゝて居々るう暫くあつてみ退化云まう洪甲も往なく養まう其翌朝早くみ学堂来く洪甲に云やうハ先生昨晩ハ行るもなりしや咳嗽ふ紀みいしるうの方ハ快活のうなうとの言ハ冥中に冥へなる故ふ乃使者をとりて先生をと迎へしなう。然れ共拙ん先生の戯ふいひもいしるうを知ら其の上命ふ従ふ尚をきゝとヤのべくお止やふ従しなうとしまふ永冷笑して止そうもき。

さて冥中のる甲学なるう洪甲に告げ知らしむる多くれども。洪甲うつてく人ゟ残さると。但潘雪松と祝石林と二人ゟハ許して語るゟのみう。然うて氏二人洪甲と交る人ゟれだ。学問徳行た小勝るなくや及等の之無おそ。なるう人ゟれた何るるゟ此を小依く洪甲学ゟ重ゟ雪松と石林とう生之のるゟと宮ひくれバ学ゟ重ゟ同くゟ一事ハ我まづ識ゟ小非ざれハ知らさを但し一求考るゟも雑きるゟ小非ざるとえひきざ。二日過くゟ来て洪甲に告て曰く。雪松ハ萬暦十一年癸未の年の榜ゟ姓名うく雪松ハ萬暦十一年癸未の年の榜ゟ姓名うく石林ゟらまづ榜ゟうくだとゟうく果て

冬来の年雪松ゟ及等せう。洪甲又石林が及等の時弟ゟと考んるゟと猶学ゟ重ゟ同くなるうど承知仕ひ。凡そ其の榜ハなお年の十月ゟ定う。秋の榜ゟ其年の正月ゟ定まるなう。且榜の定るゟと待ちゟく其弟なるうとゟうく洪甲冥てん中に畜ゟ其年ゟう三年過て万暦十三年乙酉十月ゟ於て人学ゟ重ゟ同学ゟ聖ゟ対て曰く順二ツの天榜うれうよへるゟハ萬暦十四丙戌の榜なう。下なう。同卜七年己丑の榜ゟ石林公の姓名あり。然をゟ於ふらうれバ或らよゟ下ゟよゟ下ゟよとなう。

又姓名の救多くなるうへ。おくるゝうて快樂せらるゝるゝうとつくう。洪甲其啟を怒ふ学ま聖同く冥中のゝ陽。あるゝなれば陰慈になりぬとべて冥中に於く人間の罪福を盡ふとらと。基微細るゝる許部う月旦評のおきゝゝみゝ非ぎと。卒生名事と為人くても。不圖一会恵ん生されど神乃其の織をふくむ。又卒生不名を為人くても。痛脩悟ノ改むをハ神又其馨香を觀喜と形と彩と声と響との如くなる者なりぬて亦先生もゝゝなのゝうう天ふ文章と司どる星ふ文昌星と云ゝう及等の一事ハ專此の文昌星の府ふ屬をるなう故ふ文人去身乃るハ皆此府の牀面ふ載なうぬくくゝ此文昌府中ふ分くゝ人間文人の派福を盡置をる格式を見るふ其本人のふの徴善徴悪ゝ身のかゝおゝ悪ゝまでも其本人出世の時ふ計校考るゝゝなう此ふ依く紀先の徳の積まるハ其人不若なれば出世をるゝるのうう。又紀先不徳なれを若人うれば蔭等をるゝるのうう。又其人身打々檢束ゝなれば人中に於く固く正直をもう。悪毒のゝ意るれりのをゝりぬう。又其人身持

を悩むやうなれども。人中ゟ誹るもの多くなるやうの己ゟ天榜み名を載られてる人の忽ち名を削らるゝもの有ハ。人中ゟ恥会を生ずるゆゑ故るやうの其人本名の載まぢ紀不名人ゝてても。忽載らるゝハ人中若金ゟ改むるゆゑ故るやうの冥中の成敗ハ其人の身わんりちゟ固て忽去となるゆゑ忽ゟと称りて本生斬ぜも藁を壺るやハなゝ。今天榜ニ処ゟかゝりて二榜の姓名ゟ下榜減不定也。此ゟ固く石林ゝの榜ハ己丑の年なれ共及等立身のるゟハ其時ゟ多ゝちもハぱ今ゟうハ升実ゝくなるとゝつ称るゟ石林本不若人ゟ非ざるゟ

ゟ氏るゟと再てつゝく悩むやうゆゑ故しや。果して己丑乃年及第せう而も此年の新者ハ楊貞復先生のゟ我ゟとして有うし。なう。雪松ゟ子と同時ゟ生せうゟの新者ゟ馮翊之ゟて有うしなう。元例の処ゟつゝる如く。謙諾の点者の如くうちの前者の点ゟ東部郎と云なう。さて子一百石林の方へ訪いたるゟ右の物沿ハ備ゟ石林ようゟ承つたうの予此お後ゟと写て大いゟ感数しつゝ思ひ合とるゟ有う。予幼少のゟうゟ従ゟく学の学問せう。ゟゟ修釈のお衣ハ衣徹ゟ下足ゟと云て若文字章句のうゟ各ゟ発吟のこと

なぐめまをバ甚かなびごとふ父ふ望として喜バー
めをわり盤まを仕慨る而を予ら母人甚多の痛
ふおへーくう。此ふ困て毎夜人の意もづまることを
て大路へ出て不通ふ向く行摩てとうけからう。よへを
ら我をふ子行そぞ早く及第之身ー。父母とるに
怨実に念ふて長く家門の繁昌をとんせりめた
まえとにも唱へんまをして行摩せう。此言ふ
ハ至極仕又母のるものこと思ふく化事ハ学りくう。
た郷学まて、二十一歳のは己ふ撰人の数ふ全こ。
其後都の試場ふて八度く出てしかし甚度ごと
ふ落第して空しくてのこまふ還まうがふ還

るおとふ父母のん中をと禁やう骨をひしぐ往
ふ悲ーかうた是ふ於くく又大勇猛のんを記し
仏おふ向く朝夕黙禱して而ハ。今ようまそしたと
うて而ハと遥る事能ハず。菓ー罷業深重
ひ大友大孫をいる仕志を道徳ふ潜毛頭も富
貴ふ泥べうべう官政ふ在くハ民を安ごることを
専としてがうそめふも菓ゞ身ふ私をなぞ
をうーぐさく。總じてハ人ハ我ゞ君ふ忠をと盡し。
下ハ我が父母ふ孝んをと致さとべー。ばん若敷ゆあ
らべ神明忽ち罰ーをふくし誓をりうば撃ーこと主
てくこ年過くく及第し東部郎の官ふまて升

まるなう等重の冥中のるを知せ〜っくをゝく楽どるふゝん中の君恵ふ国くよ天の冥衛冥罰のるるハ予ゞ往来の仏業ふ思いそ〜ふれど滅よ験てくきるゝと大抵今の世ふ存くも。及実ゞ立身えくく名誉を天下に伝るくもまぐをあてう乃仕合と思よべうしぢ皆幼おのれようん中に大れを立こなう。然も尤天授を漏さるふを忘む故ふ妄てふんふハ俗らぎるく。予ゞ今の身及びも。右の如く私んを立くくん勉の身の行ひを勉なる故ふらんと思ひかなり。此くやも天授を漏とるまた。良ふ一つの止むるの志ありそれ

そハ五穀の干場ふ穀粒あるまゝハ。其の友こと呼ひ。集ら原野のるふ其の類をと集。そ類毒類ゞ余なう。今支天下の士人ら皆我ゞ同類うう。此の如きと神通を算てうでう我ゞ同類ふ仕へぢるのをゆんや里をのべて及第立身ら徳行をお〜年ふ告知〜むる者うゝし。

私ふ日此決科要語の作者楊真復先生ら此緑未の年号。充ふ予ゞ立身せ〜始まれを身せ〜該きこて考まバ代の人そう。困くて先生の此緑の歩ら

を幸ひ〳〵て此書の門へかくれなるやうに
此事を写及びて子先生の方より請う
けて加くらまたるるや知ぐぐ。

東武北泉戴岳画
陰陽文繪鈔
全部一冊

このたびの人のそひなくうや亜伯の自知
孫安〳〵う墓あうかるものうあるあて
此ことめるもそうべし
和字功過自知鑑と全部一冊也

書肆

大阪心齋橋安土町 書林 河内屋和助板

京都二條通御幸町 書林 水楽屋東門郎

同 室町二丁目 書林 吉野屋仁兵衛

同 日本橋通二丁目 書林 大坂屋藤助

同 芝神明前 書林 須原屋新兵衛

同 芝神明前 書林 内野屋彌平治

同 兩國横山町三丁目 書林 和泉屋金右衛門

同 日本橋通二丁目 書林 山城屋佐兵衛

同 淺草茅町二丁目 書林 岡伊八

書肆日本橋南壹丁目 書林 須原屋茂兵衛

発行